

鶺鴒 沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 2 号

颯田本真尼と本真寺.....	岡田 哲明... 1
事業報告 2015年鶺鴒沼地区公民館まつりで展示 『鶺鴒沼にこのような人たちが住んでいました』	27
事業報告 鶺鴒沼を語る会創立40周年記念講演会 『鶺鴒沼の作家 阿部昭を語る』	34
湘南白百合学園での出張授業	森岡 澄 守谷 俊博...36
Coffee Break	38
鶺鴒沼の思い出.....	中島 誠之助...40
伊藤 聖さん追悼	43
『鶺鴒沼を巡る千一話』より 昭和初期の住宅地.....	渡部 瞭...46
今井達夫遺稿 ⑩ 『幻 聴』	今井 達夫...54
活動の記録(平成27年10月～平成28年3月).....	65
編集後記.....	68

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鶺鴒沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鶺鴒 沼 を 語 る 会 発行

颯田本真尼と本真寺

岡田 哲明（会員）

はじめに

小田急本鵜沼駅から鵜沼海岸駅へ向かう途中、左へ大きくカーブする手前の右側線路際に墓地と弁天堂、池をはさんでその奥に棟の両端に美しい宝珠を乗せた銅板葺き大屋根の本堂が見える。地元の人が親しみを込めて“尼寺”と呼び慣わしているこのお寺が本真寺である。正式には浄土宗夢想山専修院本真寺という。

このお寺を創設したのが颯田本真尼(1845～1928)である。

* * *

颯田本真尼とは

本真寺を創建した颯田本真という尼さんは、三河の吉良吉田（現：西尾市）の出身。三河という所は浄土宗の信仰が篤い土地で、彼女は12歳で仏門に入ること志願して、18歳のとき、実家の庭の一隅に小さな庵を建ててもらい慈教庵と名付けて自身の修行場とした。

ここで三年不臥の行を終えると、お弟子にしてくれという女性が次々に来て、やがて徳雲寺と名乗る尼寺となった。不臥というのは、食事と厠以外はひたすら座って念仏を唱える修行で、横になって寝ることを一切しない、それを3年続ける大変厳しい修行である。

本真尼は59歳のとき、乞われて鵜沼に慈教庵（後の本真寺）を開き、84歳で亡くなるS3年まで徳雲寺と行き来して100人余の弟子を育てた。

写真を見ると小柄な田舎くさい婆さまに見えるが、本真尼は実はすごい尼さんなのである。地震、津波、大火災などが発生すると、ただちに救援物資を調達しそれを持って救恤に駆け付けること34年間に70回余、60,000戸へ施物を配った。まさに日本の災害支援ボランティアの元祖とあってよい。日本百高僧の一人といわれる。老尼の生まれ故郷西尾市の小学校では「日本のマザーテレサ」として生徒に教えているほどである。

M23(1890)年、三河地方を高潮が襲い死者400人を超す災害に見舞われ徳雲寺も浸水した。46歳の本真尼は罹災者の困窮を目の当たりにして衣服や布団などを配布する布施活動に没頭する。以後、災害支援が「最も仏法に叶う、多くの人と結縁を結ぶ道」と思い定めた本真尼は、日本全国、災害があると聞くと支援物資の

梱をかついで被災地に出張した。その配布物資は日常、信者から頂く古着などの施物を日光消毒し、洗い直し、縫い直して蓄えて置くのである。こうした活動に篤志家が共感し、徐々に支援者の数を増やして、膨大な支援が可能となったのである。その布施行は80歳になるまで続き、実に34年間の活動範囲は、北は北海道函館の大火から南は鹿児島県櫻島噴火まで、日本全国23都道府県150余町村におよび、救恤戸数60,000余戸、勸化結縁された家100,000余戸にのぼるといふ。1戸当たり5人としても500,000人と結縁したことになる。

また、施物の総額は、S10年発行の矢吹慶輝著『本真老尼』には「もし現金に換算したら恐らく30万円から50万円に達するであろう」と書かれている。現在の物価をS10年の2000倍位とすれば、およそ6～10億円になるであろう。詳しくは巻末の布施行記録をじっくり見て頂きたい。

さて、このようにとても一人の人間がやったとは思われぬような一大布施行をした本真尼とはどんな人であったか。

生前の本真尼の面影を伝える直接的資料は2点しかない。一つは網野菊の「若い日」所載の『海辺』という小説で、T8年クリスマス前から翌年正月にかけて2週間ほど、卒論を書きに鶴沼慈教庵に滞在したときの出来事が主題になっている。もう一つは主婦の友記者のインタビューで、これは老尼80歳のとき徳雲寺を訪問しての記事で藤吉慈海著『颯田本真尼の生涯』に転載されているから、ここでは老尼75歳のときの様子を、網野菊の小説から抜き書きして以下に紹介する。

* * *

翌朝、梯子が目を覚すと、もう階下から大尼の太い、しゃがれた、男のような声が続けざまに聞こえて来た。それに混って、年取った浄念尼や若い信教尼の「ハイハイ」と答える声が絶え間なく聞こえて来る。(中略)本堂に続く廊下の張り出しの所で、梯子が大急ぎで顔を洗って、洗った顔を拭おうと手拭に手をかけたとたん、本堂でしていた例の念仏のしゃがれ声が突然近くなったので、梯子はビックリして手を止め声の方へ顔を向けた。と、本堂と庫裡との渡殿を、頭も衣と同色の灰色の頭巾で包んだお爺さん——全く、お爺さんという感じだった——が、飛ぶような速さで渡って来る。(中略)大尼は絶えず誰か彼か呼び立てている。「浄念や浄念や」と呼ぶかと思うと「千代や千代や」という。そうかと思うと、二十になったという信教尼を「小僧小僧」と呼び立てるのである。そして、その合間には、人の心をキュッとおさえつけるような咳払いと念仏の音がするのである。「まるで口やかましいお姑さんみたいだ」と梯子は思った。

お昼頃、昨日隣の別荘に引越して来たという家の奥さんがお寺へ挨拶に来た。大尼はその人を本堂に通すと、大きな声で「小僧小僧、お茶を差し上げろ。俺が東京から買って来たお煎餅を半分程差し上げろ、半分よりちいっと多い目に差し上げろ」などとしきりにどなっていた。(中略)

午後、尼達は残らずそろって本堂に集まり、お経をあげた。お経の間も、大尼は相変わらず梯子をドキッとさせるような咳ばらいをしたり、何かブツブツ小言みたいな事をいっていたが、本堂にはさすがに普段とはまるで違った空気があった。全ての尼の声が緊張していた。(中略)

その晩、食事の後、やす子と梯子は前の晩のように火鉢を中にして本を読んでいた。そこへ思いがけなく大尼が上がって来た。ふと襖の開く音に何気なく振り返った顔の直ぐ前に、灰色ずくめの大尼の男の老人のような姿を見出した時、やす子と梯子はハッとした。二人は無意識的に座を飛びのいて、自分達の敷いていた座布団を、二人とも大尼のほうへ押しやった。しかし、大尼は、それを斥けた。

「いやいや、俺は布団なぞ要らん。あんた方、お敷き。若い者は冷えてはならん。」そうやって大尼は無理に二人に敷かした。

「これはな、昨日東京から買って来た煎餅じゃが…」大尼は首桶でも抱えるようにして持っていたお盆の上の紙袋を二人の前に差し出しながらいった。そして二人が口を開くのを待たずに「実は昨夜挨拶に上ろうと思うたのじゃが、あんた方、寝てしまわれたでな…。それでな、今朝上ろうと思うていたら、又、お勤めやら何やらでひまがなく、遅なわった。なんせよ、ここは『寺』といわずに『庵』と呼んでいる位でな、いわば尼達の修業場じゃ。それでここには国の寺におっても役に立たん者ばかり寄こしてあるで、今おる者は浄念といい、信教といい、みな、ちと足らん者ばかりじゃ。いや、本当じゃぞ」大尼は若い二人の聴き手が笑いかけけるのを大急ぎで真顔で制した。「そういうわけじゃで、定めし、あんた方も不自由に思われることも多かろうが、まあまあ堪忍して大目に見ておいてやって下され。自体、あの浄念坊なぞ、いい年をし居り乍ら一向に知恵が廻り居らん。くにの寺には、もうちっとましな人間も居るのじゃが、ここに居る奴は阿呆ばかりじゃ。じゃによってな、どうか、あんた方もな、そのつもりで大目に見て居ってやって下され。俺からも、よう、したの衆にいうてはおくが、あんた方も、構わずに気を付けていうてやって下され、な」そうやって大尼は立上った。二人は階段口まで見送ろうとしたが「いらん、いらん」と押し止めてひとり、トボトボと暗い梯子段を降りて帰って行った。「いいお爺さんねえ」やす子は大尼の姿が見えな

くなるや否や小声で言った。「あら、お婆さんだわ」梯子が訂正した。二人はアハアハ笑った。お煎餅は沢山あった。(中略)

二人ともろくろく口を利かずに歩いてお寺の近くの畑道までくると、ヒョッコリ大尼に出会った。大尼は道に立って、畑の中で大根を引いている百姓夫婦に声高に話していたが、梯子達の姿を見ると急いで近寄り、「俺はな、××公爵の母堂がなくなられたで、これから東京へ行って来るが…」といい、忙し気に内懐から紙入れを出し、その中から一円札を二枚取り出して差出した。「これは少しじゃが、二人のお小遣いに…」二人は慌てて押し返したが、大尼は春子の手の中に無理に押し込めながら口早に言った。

「浄念が欲張りじゃによって、定めし、あんた方も気が悪かろうが、どうか、大目に見てやって下され。あれも年取っているし、又、ちと足らん人間じゃによってな。俺がいくら言うて聞かせても浄念には分からんのじゃ。自分のものでもなし、寺の物、欲を張ったとてつまらんのにな、どういうものか、無上にけちけちし居って、あんた方の食費なども余計に取りたがるのじゃ。さきし方も、うんと叱つといたが、まあ、あんた方、気持ち悪かろうが、大目に見とってやって下され。あれの前では、何事も知らん振りして、あれの言う通りにしとってやって下され。あれが喜ぶでな。じゃが、炭や電灯の代は払わんといて下され。それは浄念によい言うておいたで」そう言い乍ら大尼は、尚も拒んで押し返そうとする春子の手を押さえて、お札を春子の袂の中へ押し込み、嘆願するように、変に淋しい、気の弱い色を顔に浮かべ乍らささやいた。「浄念に見られてはまずいでな。浄念に見られては俺が困る」浄念尼は大尼の忘れ物をお寺へ取りに戻ったのであったが、丁度その時、お寺の方から、トツトツと小さい体を浮かせて走って来た。

何も知らない浄念尼は近づいて立止まると、いつものように目尻に細い皺を寄せてニコニコし乍ら、小さい風呂敷包を大尼に渡した。(以下略)

*

*

本真尼の逸話は藤吉慈海著『颯田本真尼の生涯』に、お弟子さんから聞き集めて記述されているが、網野菊の確かな観察眼と卓越した文章によって本真尼像が浮かび上がってくる。

本真尼を一言で表すならば、内には厳しいが外には優しい気配りの人。一時もジツとしていられない即行動の人。恐ろしいほどの勤勉さと揺るぎない信仰心の持主ということであろうか。そんな老尼にお弟子さん方も全幅の信頼を寄せている様子が見て取れる。

本真尼を支援した人々

先に述べたような膨大な支援物資、多額の支援金を得るには、多くの支援者があってこそ成し得たことである。支援者リストを巻末に載せたが、主だった支援者について述べておきたい。ここに挙げたほかに藤吉師の著書には酒田の本間、京都の阪根、名古屋の小原を挙げているが、これらの方々の実績が不明なので割愛する。

* 細川糸子(1856～没年不詳)

鵜沼の所有地 1514 坪のうち 483 坪 (坪数は T8/7/27 吉田兵吉実測図による) を寄進し説教所 (慈教庵) を建てて本真尼を招いた。この人は細川芳之助の夫人で芳之助は細川洋紙店・細川活版所を創設した人である。筆者は島本千也著『海辺の憩い：湘南別荘物語』巻末参考資料「湘南の別荘族名簿：鎌倉・鵜沼」(M45 年)のうち、鵜沼の項に「西洋紙商 細川芳之助」と記載があるのを知り、また、藤沢市立中央図書館所蔵の帝国秘密探偵社刊『昭和人名辞典』東京編「細川芳之助」の項に「叔父先代芳之助の養子となり襲名す、養母イト (安政三) 宗教：禅宗」という二代目細川芳之助に関する記述を発見した。糸子が自家の宗旨と違う浄土宗の本真尼に布施を惜しまなかったのはなぜか。夫人正法会会員であった糸子は本真尼の宗派を超越した人道的行為に深く共感したからだろう。土地を提供し、阿育王塔を寄進し、鵜沼慈教庵が関東地区の布教所として立ちゆくように様々な支援をした。

* 黒野耕斎(1878～1936) 勇(1903～1934) 父子

黒野耕斎は三河の人、大工であった。颯田家とは姻戚関係にあり、本真寺本堂建立中に勇が結核で死去、本堂竣工の翌 S 11 年 3 月 3 日、耕斎も他界した。本真寺では黒野父子を本堂建立の人柱と称えている。関東大震災で罹災した慈教庵が黒野棟梁施工かは未調査である。耕斎は「本真尼来歴書」を残した。これは藤吉慈海著『颯田本真尼の生涯』巻末年譜のもととなった。境内に耕斎の和歌「慈しき法の教えの鐘なれば世の為にせむ庵の諸人」と慈教庵を詠い込んだ歌碑がある。子孫は鵜沼に住み、現在の本真寺檀家総代を孫が務める。

* 釋雲照(1885～1909)

真言宗の僧侶、神仏分離令による仏教衰退を憂い、道德教育の場として「目白僧園」を、社会福祉には超宗派で事に当たるべきと 1889 年「十善会」(正式には十善道德法会) を組織し機関誌『十善宝窟』を刊行する。4 年後の 1893 年 7 月には女性会員による「夫人正法会」(正式には夫人撰受正法会) を組織し、機関誌

『法の母』を刊行する。華族、財閥名士の夫人を多数会員とし社会福祉に貢献した。本真尼は実弟善苗が雲照の弟子であったことから交流が始まったと思われる。本真尼布施の最大の後ろ盾といえる。

＊ 夫人正法会

釋雲照が創設した慈善団体。発起人に大隈重信侯爵夫人、毛利元徳公爵夫人、蜂須賀茂韶公爵夫人、井上馨伯爵夫人を立て、華族、財閥の夫人ら二百数十人及びゆかりの寺院住職らを会員として発足。本真尼も会員であった。

1895年、山形県酒田の震災に義捐物資として衣類 27 貫、蚊帳 50 張、古着 80 貫、50 円分の手拭風呂敷、雲照著『人の道』無能上人著『本願和讃』3000 部を本真尼に託した。

1896年の三陸地震のときは山田龍子、鳥尾泰子、三浦愛子、田中伊与子、鼓文子、玉置輝子、児玉周子の7人が発起人となり慈善金品を募集し、本真尼に託した。それ以後の布施の施物も同会からのものが多いと思われる。

＊ 和田元右衛門(1844～没年不詳)

慈教庵に弁天堂を寄進した。函館出身の実業家。当初、海産物店に奉公、荒物の行商から身を起し、鮭・昆布漁、アイヌから鹿の角と皮を買って東京で売却、また国後島に渡り硫黄を採掘精製しアメリカへ輸出、さらに新潟で石油鑿井し、東京石油株式会社設立などの諸事業を行う。晩年は仏教に帰依し十善会会員。

＊ 泉谷儀三郎・花子

大阪船場の豪商、T7年、佐賀県馬渡島の火災の際多大の援助をし、その後も島民信者のために仏像などを寄進した。花子は前年のT6年、新潟県出雲崎の大火のときは本真尼に同行して被災地救済にあたった。また、本真寺三階地蔵尊建立の際も発起人に加わる。

＊ エリザベス・アンナ・ゴルドン(1851～1925)

イングランド、ランカシャーの名門の家に生まれ、オクスフォード大学卒、ヴィクトリア女王の女官を務める。スコットランドの貴族ジョン・エドワード・ゴルドンと結婚。世界一周の途次、初来日。その後、M40年から大正にかけて日本滞任し「仏教とキリスト教の一元」を研究テーマにした人。日本に洋書が乏しいとき日比谷図書館に英書10万冊を寄付した。早稲田大学、高野山大学にはゴルドン文庫がある。T9年に再々来日、T14/6/27京都で死去している。

T2年沼津火災のおりの布施帖に「マダム・ゴルドン：布団10、窓ふき9、幕1」の記載を関西国際大学坂上教授が徳雲寺所蔵の資料から発見された。在日外国

人支援者もいたことは注目に値する。

本真尼の偉いところは、以上のような支援者が出来、施物が集まるようになって、古着などを再生して貯え、自身は粗衣粗食に徹したことである。

布施の執行例（『現代密教』第23号 2012年3月刊より抜粋）

では具体的に布施はどのように行われたのか。M29/6/15 7:32 pmに発生した明治三陸地震のときを詳述する。

7/2 釋雲照は夫人正法会会員に「東奥三陸被害者施行慈善の功德」という法話をし衣服等の資財施行による被害者救恤の督励をした。同会では「謹んで海嘯被害者に衣類の施与を請う書」を示し施与品を勧募した。

7/3 付、釋雲照より本真尼あて上京を促す書簡

7/13 本真尼上京、集積された義捐品を自ら被災地に行き施与することを志願

7/20 第一回義捐勧募締切、即日第二回勧募開始 50,000 余点が集まる。三県の被災者の実数をその筋に問い合わせ平等分与を期した。本真尼はじめ夫人会会員数十名集積所に日参し、数点ずつ束ね荷造りを完成

7/28 うず高く積まれた衣類等の加持祈祷をおこなう。衣類等 50,000 点余、現金 427 円 16 銭、阿弥陀仏尊像 1,000 枚、地藏菩薩尊像 20,000 枚、加持土砂 30,000 袋、『十善会自受法』10,000 部『人の道』1,500 部
本真尼は雲照から加地土砂の功德と供え方について指示を受ける。

8/1 以上の義捐品を汽車および汽船によって現地に発送

本真尼、祥瑞尼、智円尼が同日、上野発の汽車で仙台へ出発

8/2 本真尼一行が仙台到着、佐々木重兵衛宅に一泊

8/3 宮城県庁を訪問、正法会から派遣された旨を伝える。県庁は各郡役所へその旨を通達した。

8/5 塩竈に着き一泊

8/6 塩竈港から船で石巻港へ、船中、水難に遭われた精霊回向のため地藏菩薩尊像を流水供養。『人の道』『十善自受法』を配布

8/7 牡鹿、桃生の二郡役所慰問、十五浜の惨状に戦慄、荒浜は全村流失。3日間逗留し施物のほか『人の道』『十善自受法』を施与、墓所に赴き回向をする。

8/10～十三浜、相川、小指、大指、谷倉、長清水、田ノ浦間十里に及ぶ行程、悲惨をきわめる村々をもれなく慰問、義捐物資を施与。志津川の病院、収容所を

慰問、物資を施与、法話を行い、十善戒と念仏を授けた。

8/14～清水浜に出る、個々の惨状、戸数 34 戸、死者 180 名、そこから気仙沼まで 8～9 村 26～7 字の被災地をもれなく慰問した。なかでも階上村は全村 80 余戸すべて流出、遺体 400 余が海岸のいか所に葬られ、小石が墨々と重ねられ一本の標木があるのみ。読経して加地土砂を墓に納め供養をした。

8/17～気仙沼に着き同地の病院を慰問した。

気仙郡唐桑村、横田村を慰問し施物を施与

8/21 尾張の小西三郎氏からの義捐物資を一関まで受け取りに向かう。途中一泊

8/22～荷物を受け取る。末崎、大船渡、綾里、越喜来、大明戸、唐丹をくまなく回り施物を施与した。

9/19～釜石に着く。釜石港の被害は突出しており、犠牲者 3700 人余、西閉伊郡役所は被災者救済のため出張して来ていた。一行は病院、郡役所をいちいち訪れ被害者一同にもれなく義捐物資を施与した。

9/23～両石に出、次いで大槌、船越、織笠、山田、大沢、重茂らの 10 余ヶ村を回り、施行した。

9/29～田老に出た。釜石に匹敵する被害 400 戸のうち残存家屋 40 戸のみ。そこから南九戸の施行を行う。

10/9～青森県三戸郡の被災地に到着、八戸港の鮫、港で施行

10/15～17 上北郡に至り百石、三沢の両村で施行、これで、すべての施行を終了

10/25 盛岡県庁を慰問し、31 日午後に帰京した。

このように単なる物資援助ではなく仏縁をつなぎ衆生を救おうとしたのである。

* * * *

本真寺とは（慈教庵の創始）

本真寺（慈教庵）は非常に新しいお寺で創建は M36(1903)年、本真尼 59 歳のときである。「布教拡張ならびに日清戦争戦死病没者追悼のため」という名目で、三河と同様に慈教庵という名称で浄土宗説教所を開いたのが始まりである。

慈教庵時代 M36(1903)年～S10(1935)年

さて、その細川糸子から寄進を受けた鵜沼慈教庵があった場所は、鵜沼公民館の前の道を海に向かって 200m ほど行った右側であった。当時の呼称でいうと神奈川県高座郡鵜沼村字下鵜 5250 番地の 2 である。

庵には、本堂、庫裡、座敷、鎮守堂、阿育王塔、弁天堂が逐次建てられ、尼僧修行道場としての伽藍を整えていった。しかし T12(1923)年の関東大震災の地震と津波に遭って本堂、庫裡などすべてが倒壊した。本真尼は落胆して三河に戻ろうと思われたが、ご本尊は不思議に無傷であったので、再建の意思を固められた。

それで少し海から遠い現在の場所（藤沢市鵜沼海岸 7-1-7）で再建にかかり翌年1月には仮本堂と庫裡が一体になった建屋が完成した。

この場所は、もとは葉山又兵衛の所有地であった。又兵衛は鵜沼の大地主で、元藤沢市長 葉山峻の祖父である。峻の実弟、葉山水樹氏によると「祖父は震災後、尼さんたちが津波の土砂や堆積物で荒れた境内の復旧に苦労しているのを見て、今の場所を譲渡したのだ、と聞いている」とのことであるから、当初は同じ場所に再建するつもりが葉山氏の篤志を受けることになったのである。

S2年11月、本真尼は体調を崩し三河の徳雲寺に帰ったが翌年8月8日入寂された。弟子の黒野智山尼が二世庵主となり S6年、本堂再建とりかかり黒野耕斎父子の尽力により、S10年に落成、夢想山専修院本真寺と号するようになった。

本真寺時代 S10(1935)年～現在

S11(1936)年、智山尼入寂、第三世を兼子正戒尼が継ぎ、颯田姓となる。S44(1969)年、兼子明戒尼が第四世となる。S46(1971)年、松田圓道尼が第五世を継ぐ。H10(1998)年、代々受け継がれてきた尼僧住職に代わって齋藤良典師が第六世に就任し現在に至る。

山号(夢想山)のいわれ

お寺に山号は付き物だがなぜ夢想山と称することになったかということ、細川糸子に請われても、はじめのうち、本真尼は乗り気ではなかったという。それがわざわざ東京から三河まで何度も訪ねて来て是非にといわれるので、場所を見るだけでも一緒に鵜沼へ来てみると、丁度朝のことで、松原のかなたに雪を頂く富士が見える情景は、十年ほど前に見た夢とそっくりであった。それは富士の見える松の木が生えた野原に立っていると、岡崎昌光律寺の志運和尚が現れて「本真さん、あんたはここで関東地方を教化するようなお寺を作ることになったよ。わしがこれから図面を書いてあげよう」といってすらすらとお書きになったのが関通流（関通上人好み）の本堂であったという。あれは正夢であったかと説教所を設ける決意をされた、というところから名付けられた山号である。

では、本真寺に行ってみよう

戒壇石（花崗岩）

山門脇に立つ、正面に不許葷酒肉入門、裏面に明治三十六年十一月と彫字

山門（木造、瓦葺）

木造瓦葺、昭和？年建造（未調査）

水子供養塔（瓦積）

参道右側、関東大震災で倒壊した慈教庵の瓦で作られている

手水鉢（花崗岩）

正面に卍と奉納、側面右に大正十一年一月、左に海岸一同、裏面に東屋長谷川栄七回忌と彫字（海岸一同とあるが長谷川家寄進）

三階地藏尊（鋳銅）

矢吹慶輝発願、泉谷儀三郎ほかの寄進により彫刻家朝倉文夫の弟子、相川氏が制作、S2年11月6日開眼したが、戦時中供出された

現在のものはS50年作、礎石は開眼時のもの、裏側の銅板に以下の由来を彫字

三階地藏尊縁起

文学博士矢吹慶輝師ハ福島県無能寺矢吹良慶和上ノ法嗣ニシテ当山開基颯田本真尼ト親交アリ深く同尼ヲ敬信ス大正二年ヨリ米英仏独諸国ニ留学シ敦煌未伝ノ仏籍ヲ研究シ十余年ノ歳月ヲ経テ三階教ノ研究ナル大著ヲ刊行シ帝国学士院ヨリ恩賜賞ヲ授与セラル夫人操姉内助ノ功アルモコノ大著ノ稿成ルノ日大正十五年十月二十四日逝去セラル博士深くコレヲ悼ミ翌昭和二年十一月六日当山ニ地藏尊像ヲ建立シ大島徹水上人ヲ招ジテ開眼供養ス夫人逝去ノ日奇シクモ地藏尊ノ祭日ニ当リ三階教モマタ地藏菩薩ヲ尊信スルヲ以ッテコノ地藏尊ヲ三階地藏尊ト名付ク爾来博士夫妻ヲハジメ当山信徒ノ遺骨ヲ尊像下ニ埋葬シソノ数数百ニ及ブ今次大戦中尊像モマタ供出セラル然ルニ本年博士ノ三十七回忌夫人ノ五十回忌ヲ迎エルニ当リ嗣子輝夫氏追慕ノ情ヤミカタクコレヲ再建セラル

金井征之氏 鋳造

藤吉慈海師 撰文

昭和五十年八月二十四日 地藏尊本祭日 本真寺

〔彫刻家：金井征之（1942～）日展系〕

弁天堂（木造平屋、屋根銅板葺き前面入母屋、背面切妻）

池に架かる赤い橋の先に建つ、和田元右衛門の寄進、慈教庵から移設

阿育王塔（花崗岩）

本堂向って左側、細川糸子の寄進 大正 6 年建立

薬師如来立像（花崗岩）

本堂向って左側 石造 台座裏面に本堂屋根銅板総葺替記念

平成三年十月吉祥日落慶 施主協賛者一同 当山第五世 光誉代 の彫字

納骨堂（花崗岩）

伊東将行碑（自然石）

正面に伊東将行

裏面に大正九季七月二十九日薨 伊東縫子 建之 の彫字

動物霊塔

墓地

本真尼、諦真尼、歴代庵主

その他有名人：阿部昭（作家）越谷達之助（作曲家）長谷川栄（路可の叔母）

本堂（木造平屋寄棟作り銅板葺）

妻入りの本堂は珍しい。昭和 6 年着工、昭和 10 年落成

本尊：阿弥陀如来座像

木造寄木造り 玉眼入 像高 90 cm

三河の丹羽氏が頭部を、京都の仏師小泉氏が体部を作成 胎内から明治 34 年の新聞が平成 18 年の修理の際、発見された。本真尼は明治 36 年慈教庵開基の 2 年以上前から準備に掛っていたことが判明

聖観音菩薩立像

傍本尊。寛永年間三代将軍家光が浅草寺に寄進したもの、のち駿河台狩野家の守り本尊として河鍋暁斎が受継ぎ、さらに娘の河鍋暁翠が智山尼と親交があったので当寺に託したという

出山の釈迦（歩む釈迦像）

本堂本陣裏側の杉板に長谷川路可が母の供養のため昭和 25 年に制作した墨絵

伏鉦（ふせがね）

寛永 4 年の銘あり、藤沢市文化財に指定

梵鐘

扁額

釋雲照筆「皆当作仏」など

開祖以後の歴代庵主プロフィール（故人のみ）

第二世：颯田智山尼（在位期間 1928～1936）旧姓黒野

幼少期から鵜沼で過ごし母堂と足繁く本真寺に通ったという若尾肇氏のエッセイには「本真尼亡き後は智山さんこと颯田智山さんが老尼として庵主さんを継がれたが、智山さんも本真尼の教えを忠実に継承し、己および身内に厳しく、他人には優しい典型的な老尼であった。私は物心ついてから接する機会が長かったので思い出も数多く残っている。智山尼が花祭りなどに集まった村人に、お釈迦様の教えを諄々と説くときの柔和な眼差しと目尻の皺、ややハスキーな声はいまも私の脳裏にはっきりと刻みつけられている。（中略）智山尼の大きな仕事の一つは、本真老尼のご意志を継いで、仮の御本堂を本格的な御本堂にし、地域のために開放もできるような大伽藍を建立したい、との念願を実現したことであった。

この伽藍は昭和十年に完成し慈教庵は本真尼にちなんで本真寺となった。伽藍のスケールは今までより一際大きかったので、檀家の浄財だけでは足りず、借金返済のため、尼さん方の苦闘がそれから始まった。その一つは、毎年大寒になると町内を托鉢に回ることであった。我々はこれを寒行と呼んでいた。肌を刺す寒い北風が吹く中を、尼さんたちが一列になってお念仏を唱えながらチリーンチリーンと鉦を鳴らして歩く。私は母から五銭か十銭のおひねりをもらい表に飛び出す。尼さんたちは子どもの私に深々と一礼し、私の姿が消えるまでお経を唱えつづけ、もう一度丁寧に一礼してから、再び鉦を鳴らして歩み去る。これは、借金完済まで欠かさず続けられた。」

※鵜沼海岸有田商店から智山尼が当初の慈教庵跡地を売った領収書の写しが発見された。敷地の約半分を売ったときのものである。坪あたり 18.59 円
買主の名前がないので、領収書の残欠か。本堂再建のための資金繰りであろう。
残りの敷地も、ほぼ同単価で売却されたと推定される。

一金五千円也

土地実測二百六十九坪也

売渡し候につき右金員正に領収候也

昭和八年十二月九日

慈教庵 颯田智山 印

第三世：颯田正戒尼（在位期間 1936～1969）旧姓兼子

第四世：兼子明戒尼（在位期間 1969～1971）

同じく若尾氏のエッセイからの引用。

智山さんが亡くなられて明戒さんと正戒さんという姉妹の尼さんが後継者であったが、何故か遺言によって正戒さんが庵主になった。だが、正戒さんは姉を立てて明戒さんを実質的な庵主さんにはしていた。

この姉妹は、どちらも堂々たる体躯だったので幼児の私には男に見え、母に、「明戒さんと正戒さんは本当に女なの？」と何度か聞いたものである。明戒さんは、身体に似合わず繊細な気質の持主で、絶えず口の中で「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」と暇さえあれば念仏を唱え、本真さんや智山さんの念仏三昧を継承しようと努めておられたのが印象的であった。一方、正戒さんは豪放磊落な男性を思わせ、二人で御本堂に飾るお花を取りに我が家に見えた時、世間話の中に「わしらが京都へ行って祇園の町を通ったら、お女郎さんから“ちょいとお兄さん”と声を掛けられたがね。ウワッハッハ…」と喋って大笑いしていた。（中略）

また私が海軍兵学校に合格して江田島に向って出発するとき、町内の人たちが幟を立てて送りたいと、申し出てくれたが「元々軍人志望の私が専門職の学校へ行くのは、応召とは違いますからそれだけのご辞退させて下さい」と丁重にお断りしたのだが、明戒さんは「そうはいかんぞね」と喋って藤沢駅を出発するとき唯一人プラットフォームに入って来て「体に気をつけて頑張っておくりやあせ。ナムアミダブツ ナムアミダブツ」と見送ってくれた。

本真寺の年間行事

1月：御忌別時會（法然上人のご命日の念仏會）

3月：春彼岸會（春分の日）

4月8日：灌仏會（花祭り：お釈迦さまの生誕日）

8月8日：開山忌（颯田本真尼のご命日）施餓鬼會

24日：地藏盆（お地藏さまへのお参り）

9月：秋彼岸會（秋分の日）

12月31日：除夜の鐘

毎月8日：午後1時から お勤め（お経念仏）法話の會

ただし1月・4月は午前11時から

本真寺



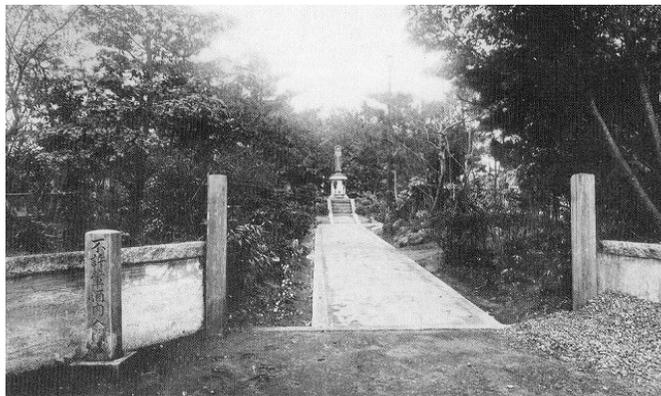
颯田本真尼



本真尼筆跡



本真寺全景 昭和 12 年頃



本真寺入口 昭和 10 年頃



本堂遠景 昭和 16 年頃



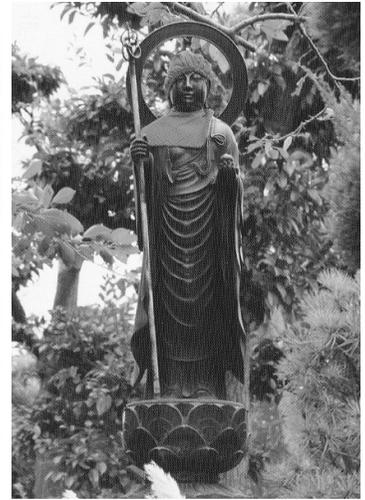
本真尼墓 叔母本乘尼、妹諦真尼と共に祀られている。左の五輪塔は智山尼、正戒尼、明戒尼の墓



弁天堂



現在の山門



地藏菩薩



本尊 阿弥陀如来



現在の本堂

データ編

◆ 颯田本真尼年譜 (歳は数え歳)

- 弘化 2(1845) 1 歳 11/28 愛知県幡豆郡吉田町大字吉田伝蔵荒子 358 颯田清左衛門の子 12 人 (うち 6 人が出家) の長女 (本名りつ)
本真尼(1845/11/28~1928/8/8)、諦真尼(1848/6/6~1924/11/25)
海雲(1852~1917/12/2)、雪門、善苗、(1 名不詳)
- 安政 3(1856) 12 歳 9/1 愛知県碧海郡旭村中山貞照院の高橋天然和上につき得度。
幡豆郡横須賀村東城真珠庵に入り叔母で師でもある本乗尼
のもとで修行する
- 文久 2(1862) 18 歳 2/7 吉田町に慈教庵 (のちの徳雲寺 : 愛知県西尾市吉良町吉
田伝蔵荒子 19) を創建、3 年間の不臥念仏修行に入る
- 慶應 1(1865) 21 歳 不臥念仏成就後、愛知県幡豆郡寺津村瑞松庵の実英尼に宗学
律義を学ぶ
- M 6 (1873) 29 歳 四国八十八か所遍路巡礼 (弟子同道)
- M10(1877) 33 歳 5/9 慈教庵を徳雲寺という寺号を公称することを許可さる
7/13 浄土宗管長大僧正養鷗徹定上人より教導職補に任命
- M12(1879) 35 歳 8/15 徳雲寺住職に任命
- M13(1880) 36 歳 4 月 総本山知恩院門主より慈教講社長任命
8/5 徳雲寺建立に付き総本山より賞詞を受領
12/23 信濃講百口加入信徒勧請により総本山より賞詞を受領
- M14(1881) 37 歳 12/28 大本山黒谷金戒光明寺法主獅子吼観定上人について宗
戒両脈を相承
- M15(1882) 38 歳 7 月 徳雲寺本堂建立を発願す
- M16(1883) 39 歳 9 月 徳雲寺本堂竣工、久我誓円尼を屈請し入仏式を举行
12/25 徳雲寺本堂建立、総本山より賞詞・金千匹を受領
- M18(1885) 41 歳 貞松院戒幢和上につき形同沙弥戒を受領
- M20(1887) 43 歳 浄土宗管長より教師補に任命
- M22(1889) 45 歳 7/20 浄土宗管長日野靈瑞上人より幡豆郡西尾町寄近天然寺
兼務住職を拝命
- M23(1890) 46 歳 6/5 総本山常念仏勧募につき知恩院門主より大師御絵伝一軸、
門主真筆賜る
8/17 三河地方、大雨に高潮が重なり大規模洪水発生、徳雲寺

- も浸水。以後、全国で発生する災害の被災者救恤に乗り出す
- M26(1893) 49 歳 4/20 岐阜県知事曾我部道夫より震災救恤につき木盃、賞詞を受領
7/28 釋雲照「十善会」「夫人正法会」を発足、会員となる
- M29(1896) 52 歳 4/8 浄土門主大僧正鳳誉上人より賞状を受領
5/1 酒田町長中山英則より感謝状を受領
- M30(1897) 53 歳 山形県知事押川則吉より賞詞を受領
- M31(1988) 54 歳 10/1 岩手県知事末松直方、宮城県知事千頭清臣、青森県知事河野主一郎より津波罹災者救恤につき賞詞を受領
- M32(1989) 55 歳 4/14 浄土宗管長野上運海上人より寄近天然寺兼務住職継続を任命
6/2 真珠庵兼務住職に任命
7/24 静岡県知事山田春三より掛塚、白羽火災救恤につき木盃一組を受領
9/4 浄土宗管長野上運海上人より権少僧都に任命
12/18 名古屋忠魂堂事務勸募係を任命
- M33(1900) 56 歳 2/1 岩手県知事末松直方より大津波救恤につき木盃、賞状を受領
12/14 静岡県島田町長桑原古作より感謝状を受領
- M35(1902) 58 歳 7/24,10/30 の2度にわたり静岡県知事山田春三より木盃、賞状を受領
12/20 総本山知恩院門跡より阿弥陀堂再建事務賛襄の件につき賞状を受領
- M36(1903) 59 歳 9 月、布教拡張並びに日清戦争戦死病没者追悼のため相模国高座郡鵜沼村に浄土宗説教所を建立し慈教庵と号す
- M38(1905) 61 歳 11/1 愛知県知事深野一三より木盃一組を受領
- M39(1906) 62 歳 12/27 真珠庵兼務住職を M42/12/28 まで継続を任命
- M40(1907) 63 歳 3/16 総本山知恩院阿弥陀堂再建信徒奨励につき紋章入り香盒、賞状を受領
6/15 静岡県伊東町長大原坦より大火救恤につき感謝状を受領
6/16 寄近天然寺兼務住職を M43/1/15 まで継続を任命
- M42(1909) 65 歳 11/5 賞勲局総裁正親町実正より函館大火罹災者救恤につき銀杯、賞状を受領

		12/28 真珠庵兼務住職継続を任命
M44(1911)	67 歳	6/12 寄近天然寺兼務住職継続を任命
T1 (1912)	68 歳	12/20 青森県知事武田千代三郎より木盃一組を受領
T5 (1916)	72 歳	2/17 浄土宗管長山下現有上人より補教に任命 12/20 青森県知事小浜松太郎より木盃を受領
T8 (1919)	75 歳	佐賀県東松浦郡名護屋村馬渡島の仏教徒へ阿弥陀如来像 100 体施与を約す (S7,8 年にわたって実施)
T11(1922)	78 歳	8 月浄土宗吉水会三河支部設立、初代支部長に推薦
T12(1923)	79 歳	9/1 関東大震災津波で慈教庵倒壊、本尊無事、身に怪我なし 10 月、現在地 (藤沢市鵜沼海岸 7-1) で再建に着手
T13(1924)	80 歳	1 月庫裡完成、本堂は S10/4 に竣工 (黒田耕斎の尽力による) この頃より軽度の中風症となる 3 月浄土宗開宗 750 年記念大法要に知恩院へ登嶺
T14(1925)	81 歳	7/2 浄土宗管長山下現有上人より権大僧都に叙任
S1(1926)	82 歳	2/11 愛知県自治会長山脇春樹より社会事業家として表彰、金 20 円を拝領
S2(1927)	83 歳	1 月鵜沼慈教庵にて食欲なく水と葡萄のみ摂取、その後回復 11/6 慈教庵境内に矢吹慶輝、泉谷儀三郎発起人となり地藏尊の銅像建立開眼供養に助けられながら参列 11/10 愛知県吉田町徳雲寺へ帰り静臥念仏して療養に専念
S3(1928)	84 歳	8/8 夜 10 時危篤状態 12 時、徳雲寺にて往生
S4(1929)		酒田市中央東浄徳寺に分骨舍利塔建立さる

◆ 颯田本真尼布施行記録 (歳は数え歳)

M23(1890)	46 歳	8/17 大雨・高潮で吉良地区洪水、死者 378 名、救恤に専念
M24(1891)	47 歳	11 月岐阜県大垣震災救恤 (注 1) 笠松の称円尼 (智暁庵主) と衣類等 22 梱を 2,900 戸へ
M25(1892)	48 歳	1/2 同上、笠松、竹鼻町 衣類等を 1,300 戸へ
M28(1895)	51 歳	5/21 山形県酒田震災救恤 (注 2) 衣類 27 貫、蚊帳 50 張 古着 80 貫、手拭等 50 円分、金 100 円『人の道』『軍事に関する観念』『本願和讃』3000 部を 1,100 戸へ (念称尼、教真尼、真瑞尼、随行) 7/4 同上 (2 回目) 衣類等 318 梱を持参

		11月～翌年1月、同上被害甚大区域に（3回目）衣類等440貫35梱『人の道』3000部を持参
M29(1896)	52歳	6/15の三陸大津波（注3）に雲照の要請を受け夫人正法が集めた衣類等50,000点、『人の道』1,500部、『十善戒自受法』10,000部、阿弥陀仏尊影1,000枚、地藏菩薩尊影20,000枚、加持土砂30,000袋を青森・岩手・宮城3県を巡り施与 8/1～宮城県 8/21～岩手県 10/9～岩手県 10/31 帰京と滞在3ヶ月（祥瑞尼、智円尼随行）に及んだ
M30(1897)	53歳	6月山形県東田川郡手向村大火
M32(1899)	55歳	4/23 静岡県磐田郡掛塚白羽大火衣類等15梱を300戸へ 7月白石町火災 衣類等 11/19 長野県下伊那郡根羽村火災 衣類等7梱を95戸へ
M33(1900)	56歳	12/7 静岡県志太郡島田町大火 衣類等7梱を140戸へ
M35(1902)	58歳	12/24 神奈川県小田原町火災 衣類等35梱を200余戸へ 12/28 足柄下郡酒匂村火災 衣類等90戸へ
M40(1907)	63歳	5月静岡県田方郡伊東町火災 衣類等700点を181戸へ 11月函館市大火(注4) 衣類等25梱を4300戸へ（智山尼正道尼随行）
M41(1908)	64歳	6/18 同上火災窮民へ 衣類等50梱（5,522点）手拭600反を3,600戸へ（本良尼随行）
M43(1910)	66歳	6/3 青森市大火（注5） 衣類等15梱を350戸へ（良信尼随行） 11/29 同上2回目の救恤 衣類等68梱、手拭650反、袋1,500を3,750戸へ
M44(1911)	67歳	4/10 同上3回目の救恤 衣類等10梱を2,050戸へ 12/13 山形市火災（注6） 衣類等32梱を800戸へ 12/17 山形県新庄町火災 衣類等4梱を100戸へ
T1(1912)	68歳	12/11 静岡県伊東町火災 衣類等を100戸へ
T2(1913)	69歳	12/24 静岡県沼津町火災 衣類等28梱、手拭300反を2,000戸へ

- T3(1914) 70 歳 7/29 鹿児島県櫻島噴火（注 7）衣類等 56 梱、手拭 630 反を
1,600 戸へ
10 月青森県東津軽郡奥田町飢饉 金 250 円、衣類等を 350
戸へ
11/19 櫻島噴火罹災移住民救恤 衣類等 25 梱を 4 か所 500
戸へ
この年 3 回目の鹿児島行き
- T4(1915) 71 歳 4/10 静岡県伊東町火災 衣類等 7 梱を 150 戸へ
11/7 宮城県気仙沼町罹災 衣類等を 1,600 戸へ
- T5(1916) 72 歳 1/25 岩手県盤井郡薄衣村火災 衣類等を 103 戸へ
11/18 宮城県伊具郡角田町火災 衣類等を 250 戸へ
11/20 青森県上北郡野辺地町大火災 衣類等を施与に
- T6(1917) 73 歳 3 月三重県阿漕村家城火災 衣類等を 101 戸へ
4/21 秋田県能代港火災 衣類等を 242 戸へ
7/3 新潟県古志郡黒条村火災 衣類等を 50 戸へ
7/5 同郡上川西村火災 衣類等を 20 戸へ
7/12 新潟県三島郡出雲崎罹災 衣類等を 200 戸へ
泉谷花子を同道
7/17 青森県南津軽郡大鰐村火災 衣類等を 160 戸へ
12/13 同弘前市他 3 カ村火災 衣類等を 550 戸へ
- T7(1918) 74 歳 1 月新潟県中蒲原郡亀田村 金 1,000 円施与
3/4 佐賀県馬渡島火災（注 8）衣類等 5 梱を 38 戸へ
5/29 神奈川県三浦郡三崎町火災 衣類等を 358 戸へ
6 月兵庫県船井郡笹木村罹災 衣類等を施与に
- T8(1919) 75 歳 11/8 兵庫県城崎町内川村罹災 衣類等を施与に
12 月再度、馬渡島へ仏像修理
- T9(1920) 76 歳 1/11 神奈川県真鶴町火災 衣類等を 350 戸へ
5/27 福井県南条郡杣山町火災 衣類等を施与に
6/22 新潟県北蒲原郡亀代町火災 衣類等を施与に
馬渡島へ 3 度目の慰問、仏像 100 体寄付を開始（S8 完了）
10/26 鹿児島県百島村罹災 衣類等を施与に
10/27 神奈川県小田原町大火 衣類等を 500 戸へ
11/25 長野県上高井郡仁礼村火災 衣類等を施与に

		12/16 兵庫県美方郡関町火災	衣類等を施与に
T10(1921)	77 歳	4/19 徳島県那賀郡羽浦町大火	衣類等を施与に
		4/20 鳥取県東伯郡讚津村火災	衣類等を施与に
		5/10 福井県吉田郡浄法寺村大火	衣類等を 100 戸へ
		5/24 静岡県志太郡焼津町火災	衣類等を施与に
		6/5 福島県石城郡内の郷村火災	衣類等を施与に
		11/5 福井県吉田郡浄法寺村	衣類等を 60 戸へ
		11/28 青森県東津軽郡今別村火災	衣類等を 104 戸へ
		12/6 北海道函館市大火災	衣類等を 400 戸へ
		12/12 秋田県秋田郡五城目町火災	衣類等を 260 戸へ
T11(1922)	78 歳	1/29 鹿児島県櫻島噴火罹災	衣類等を施与に
		2/28 青森県東津軽郡油川町罹災	衣類等を施与に
		3/26 秋田県南秋田郡土崎港火災	衣類等を施与に
		3/30 福島県内の郷村 2 回目	衣類等を施与に
		6/17 静岡県田方郡土肥村大火	衣類等を施与に
		8 月島根県簸川郡佐香村大火	布団衣類等数百点 70 戸へ
		11/29 秋田県南秋田郡土崎港 2 回目	衣類等を施与に
T12(1923)	79 歳	3/29 長野県下伊那郡飯田町大火	衣類等を施与に
		5/16 新潟市沼垂町外罹災	衣類等 500 余戸へ (智山尼代行)
		12 月片瀬町腰越	布団衣類等 200 余戸へ (智山尼代行)
		同、鎌倉市地震火災罹災者救恤	布団衣類等 500 戸へ (智山尼代行)
T13(1924)	80 歳	神奈川県小田原町震災者救恤	衣類等を 1,000 戸へ
		3/15 藤沢町震災窮民救恤	衣類等を施与
		芝浦バラック焼失	

本真尼の布施行は 34 年間に全国 23 県 150 余町村、救恤戸数 60,000 余戸、勸化結縁された家 100,000 余戸、施物の総額は現在の価値にして 6~10 億円分である。

注1) M24/10/28 濃尾地震、震源は根尾谷 (現:岐阜県本巣市) 規模 M8.0
全壊 140,000 戸 死者 7,273 人、負傷者 17,175 人

注2) M27/10/22 庄内地震、震源は山形県酒田市、規模 M7.0
全壊 3,157 戸 全焼 12,118 戸、死者 718 人、負傷者 808 人

- 注3) M29/6/15 pm.7:32 明治三陸地震・津波、震源は釜石沖、規模 M8.2～ 8.5
 岩手：流失家屋 5,183 戸、全半壊 853 戸、死者 91,058 人
 宮城：流失家屋 985 戸、全半壊 387 戸、死者 3,452 人、負傷者 1,241 人
 青森：流失倒壊家屋 480 戸、死傷者 460 余人
- 注4) M40/8/25 函館市大火、罹災面積 40 万坪、焼失戸数 12,390 戸、死者 8 人、負傷者 1,000 人 20 か所の避難所に 32,428 人を収容
- 注5) M43/5/3 青森市大火、市内 8,900 戸のうち 5,232 戸焼失 死者 22 人、負傷者 163 人 罹災者 34,000 人
- 注6) M44/5/8 山形市北部大火、焼失戸数 1,000 戸（県庁も焼失）死者 3 人
- 注7) T3/1/12 鹿児島県櫻島大噴火 噴火地震規模 M7.1 噴出物 32 億トン 脇村落は埋没 噴火は約 1 ヶ月つづき大隅半島と接続 島民 20,000 人のうち死者 56 人、3 分の 2 が島外避難
- 注8) T7/1/30 佐賀県馬渡島大火 全島戸数 200 戸余ほぼ罹災

◆ 本真尼を支援した篤志家（順不同）

細川侯爵家（細川護立・博子）

一条公爵家（一条実輝・悦子は細川護立の姉妹）

福原男爵家（福原実？）

泉谷儀三郎・花子（大阪市東区淡路町 3）船場の木綿問屋、

花子は馬渡島火災に深く同情し、様々な支援をした。矢吹慶輝・相馬黒光とともに地藏尊建立

細川糸子（東京）正法会会員（夫、細川芳之助は細川活版所創立者）鵜沼別荘の土地 483 坪を提供。慈教庵内に阿育王塔を寄進。震災後の移転についても協力した

葉山又兵衛（鵜沼）地主、震災後の移転先の土地（現：本真寺地所）を譲渡

相馬愛蔵・黒光（東京新宿）中村屋：矢吹博士を通じて本真寺へ

黒野耕斎（鵜沼）三河出身の大工。本真尼の親戚。震災後本堂再建に尽力、藤吉慈海『颯田本真尼』巻末年譜のもととなる『本真尼来歴書』を執筆

裕文七（東京市向島区請地）石油精製：鵜沼に別荘あり慈教庵に様々な寄進

松本源三郎・房子（東京日本橋）太物商：鵜沼に別荘あり

中川清太郎・きの女（東京本所）質商：鵜沼に別荘あり

和田元右衛門（東京小石川）石油鑿井：弁天堂を寄進 釋雲照の十善会会員

川本家（大阪）

本間家（山形県酒田市）日本最大の地主：T6~7 ころ、年 7 回本間家へ行った

田村家（山形県酒田市）

斎藤たみ江（山形県酒田市）梨屋漬物店：本真尼の定宿、T7~11 は浄徳寺が定宿

阪根弥兵衛（京都市）伏見伸銅合名会社？

伊藤次郎左衛門（名古屋市）松坂屋百貨店

小原家（名古屋市）

さく子（仙台）

間瀬翁太郎（函館市）

エリザベス・アンナ・ゴルドン（東京）日比谷図書館に英書 10 万冊を寄付

夫人正法会：釋雲照（1885~1909）が 1893 年に創設した慈善団体

発起人に大隈綾子（重信夫人）毛利安子（元徳公爵夫人）蜂須賀随子（茂韶侯爵夫人）井上武子（馨伯爵夫人）

三陸津波のおり義援金募集発起人

山田龍子（山田頭義伯爵夫人）鳥尾泰子（鳥尾小彌太子爵夫人）

三浦愛子（三浦梧楼子爵夫人）田中伊興子（田中光頭伯爵夫人）鼓文子

玉置輝子 児玉周子 {さわこ?}（児玉秀雄伯爵夫人?）

◆ 颯田本真尼・徳雲寺・本真寺に関する文献資料（明朝は未収集）

谷山恵林 著 『明治以後に於ける仏教女性の社会事業ならびに社会教化概観』

黒田耕斎 著 『本真尼来歴書』 手書き資料

大島徹水 『円明本真』（本真詳伝を書くべく収集した資料）明戒尼が石橋真誠に託した（資料は吉田久一が筆写?：淑徳大学所蔵?）

矢吹慶輝 著 『本真老尼』 非売品 慈教庵発行 1935/4/25 両友堂森島印刷所

藤吉慈海 著 『布施行者 颯田本真尼』 非売品 1951/1 刊

藤吉慈海 著 『布施の行者 颯田本真尼』 春秋社 1970/8 刊（上記増補改訂版）

藤吉慈海 著 『颯田本真尼の生涯』 春秋社 1991/10 刊（上記の再版）

相馬黒光 著 『滴水録』（本真尼のこと p25~30）非売品 1956/2 刊 大日本印刷

浄土宗総合研究所編 『浄土宗の教えと福祉実践』 ノンブル社 2012/5 刊

第 2 章「颯田本真尼と矢吹慶輝にみる福祉思想と実践」坂上雅翁

坂上雅翁 「徳雲寺所蔵 颯田本真尼の新出資料」研究紀要 15

関西国際大学機関リポジトリ 2014/3/31 刊

林 千代 著 「颯田本真」『社会事業に生きた女性たち』五味百合子編著 1973

ドメス出版

- 吉田久一 著 『日本近代仏教社会史研究』1964 吉川弘文館
著者未調査 『女性仏教』第17巻 第6号 1972/6月号
吉水学園高等学校編『浄土宗尼僧史』… 国立国会図書館デジタル閲覧可
西尾市教育委員会：吉良町史編纂委員会編『吉良の人物史』2008/3
吉良町立吉田小学校道徳指導資料「日本のマザーテレサ颯田本真尼」2008/6/23
モラロジー研究所出版部編『歴史に学ぼう先人に学ぼう 第5集 慈愛と信念に生きた人』
2011/6「日本のマザーテレサ颯田本真尼」の項：安井克彦 著
今岡達夫「近代の肖像」シリーズ「颯田本真(1)(2)(3)」2010/9/2, 7, 9 中外日報
中平文子ルポ「タイトル不詳」T2 夏ルポ 掲載誌不詳
婦人記者ルポ「社会救済事業の先駆をなした老尼僧の生涯」主婦の友 T14/新年
特別号(いつも世に隠れて奉仕の為に盡した本真尼の八十年の生涯)
菅野眞慧「颯田本真尼を巡る旅」2011～2012(1)(2)(3)(4) 聖者光明会 HP
植西武子「時を駆けた女性：颯田本真尼の偉業」聖者光明会 HP
田中悠文「釋雲照律師と夫人正法会の被災地支援」『現代密教』23号 2012/3 刊
佐賀新聞 「大火からの島の再起支えた恩人を法要」唐津市馬渡島 2012/10/15
庄内日報社 「郷土の先人・先覚 88《颯田本真》」1988年10月 田村寛三 記
中日新聞「近代求道的一面：被災者に半生をささげた尼僧」2008/4/13 石上善応
斎藤 真 「漬物王国山形ブログ 漬物の梨屋：颯田本真尼」2012/7/22
田中まさ子 「堀川の尼寺さん」『鵜沼』32号 1986 鵜沼を語る会刊
富士 山 「鵜沼の尼さん」『鵜沼』33号 1986 鵜沼を語る会刊
塩沢 務 「颯田本真尼と鵜沼慈教庵」『鵜沼』44号 1988/9 鵜沼を語る会刊
若尾 肇 「鵜沼の思い出続・堀川の思い出」『鵜沼』67号 1993 鵜沼を語る会刊
若尾 肇 エッセイ「第8章 尼寺さん(本真寺)」『原本不詳』
鎌倉光明寺 浄土宗神奈川教区テレフォン法話「900話」
渡部 瞭 「鵜沼を巡る千一夜 155話『慈教庵創建』」
// 「鵜沼を巡る千一夜 247話『慈教庵移転』」
本真寺編 「浄土宗夢想山専修院 本真寺」2013/9/23 発行者 斎藤良典

◆ 文献著者略歴

- 谷山恵林： ? ~ ? 宗教学者 文学博士 大正大学教授
矢吹慶輝：1879~1939 福島県出身 宗教学者 文学博士 東京大学助教授、大正
大学教授 東京市社会局長(矢吹良慶和上の息)

大島徹水：1871~1945 大僧正・増上寺法主 家政女学校校長
藤吉慈海：1915~1993 佐賀県出身 京都大学文学部哲学科卒 花園大学教授
相馬黒光：1876~1955 宮城県出身 夫愛蔵と新宿中村屋創業、芸術家を援助
坂上雅翁：1951~ 東京都出身 大正大学卒 関西国際大学教授 浄土宗総合研究所
五味百合子：1914~2009 社会学者 日本社会事業大学名誉教授
林 千代： ?~ 淑徳大学助教授
吉田久一：1915~2005 新潟県出身 大正大卒 社会福祉学 東洋大教授 淑徳大
教授
安井克彦：1944~ 愛知県西尾市出身 名古屋学芸大教授 前愛知県吉良町教育長
今岡達夫： ?~ 浄土宗総合研究所主任研究員
中平文子：1888~1966 愛媛県出身 小説家
菅野眞慧尼：1973~ 大分県出身 宇佐市下時枝 237 梵天山法性院善光寺副住職
植西武子： ?~ 聖者光明会会員？
田中悠文：1964~ 智山伝法院宗学研究室客員講師
石上善応：1929~ 北海道出身 仏教学者 大正大学名誉教授 淑徳短大学長
田村寛三： ?~ 庄内日報記者？
斎藤 真： ?~ 漬物の梨屋 店主 斎藤たみ江の孫 or 曾孫？
田中まさ子：?~2000 鵜沼を語る会
富士 山：1894~1991 医学博士 鵜沼を語る会
塩沢 務：1918~1998 郷土史研究家 鵜沼を語る会
若尾 肇：1923?~? 少年期、葉山家の北側に住む
渡部 瞭：1940~2012 神奈川県立高校教師 鵜沼を語る会
斎藤良典： ?~ 本真寺第6世住職

◆ 本真寺・本真尼が書かれている文学作品

網野 菊 著 『若い日』『海辺』S17/3 刊「網野菊全集 第1巻」1969/5 講談社刊
阿部 昭 著 『子供の墓』婦人の友 1972/10 月号 阿部昭全作品 3 1984 福武書店
佐江衆一 著 『藤沢さんぼみち 藤沢三十六景』『鵜沼の尼寺』1981 藤沢風物社

◆ 本真寺・本真尼を扱った作家

網野 菊：1900~1978 東京都出身 小説家 日本芸術院会員
阿部 昭：1934~1989 広島県出身 小説家 鵜沼が題材の小説が多い
佐江衆一：1934~ 東京都出身 小説家 現在片瀬に住む

◆ 本真尼の足跡が残るところ

徳雲寺：愛知県西尾市吉良町吉田伝蔵荒子 19（墓あり）

本真寺：神奈川県藤沢市鵠沼海岸 7-1-7（墓あり）

西寿寺：京都市右京区鳴滝泉谷町 16（墓あり）

馬渡島：佐賀県唐津市鎮西町馬渡島（観音堂あり）

浄徳寺：山形県酒田市中心東町 4-6（舎利塔あり）

あとがき

颯田本真尼に関する文献は藤吉慈海の著書からの引用が大半である。本文も同著を底本にし、それにその他の資料を補足している。とはいえ、私が調べはじめたのは、ほんの半年前からのことで、このレポートはいわば中間報告である。

けれども、地元でないと分からないことも、少しは盛り込めた。細川糸子、和田元右衛門の特定、慈教庵の地籍と地積の確定など。まだまだ調査せねばならないことが多々あることを感じると同時に、調査に着手したのがいかにも遅すぎたと感じる。なぜなら藤吉慈海師は鵠沼からは目と鼻の先、鎌倉光明寺で 1983 年から法主であられた。足元暗しとはこのことだ。しかし、現在本真尼の研究をされている諸賢、とくに昨年新資料を徳雲寺で発見し発表された関西国際大学 坂上雅翁教授や、馬渡島の現状を「聖者光明会」の HP に報告された大分善光寺副住職 菅野眞慧尼のような方がおられる。このお二方のみならず、新資料、新知識をご教示頂きたいし、本真尼のお墓がある三河徳雲寺、京都西寿寺や舎利塔のある酒田浄徳寺にもお参りしたい。できれば馬渡島へも足を延ばしたい。

さらに研究をかさね、いずれ本稿を補足する稿が書ければと思っている。

（おかだ てつあき）

編集註：M=明治 T=大正 S=昭和 H=平成

【事業報告】

鵜沼地区 公民館まつり

2015年10月17-18日

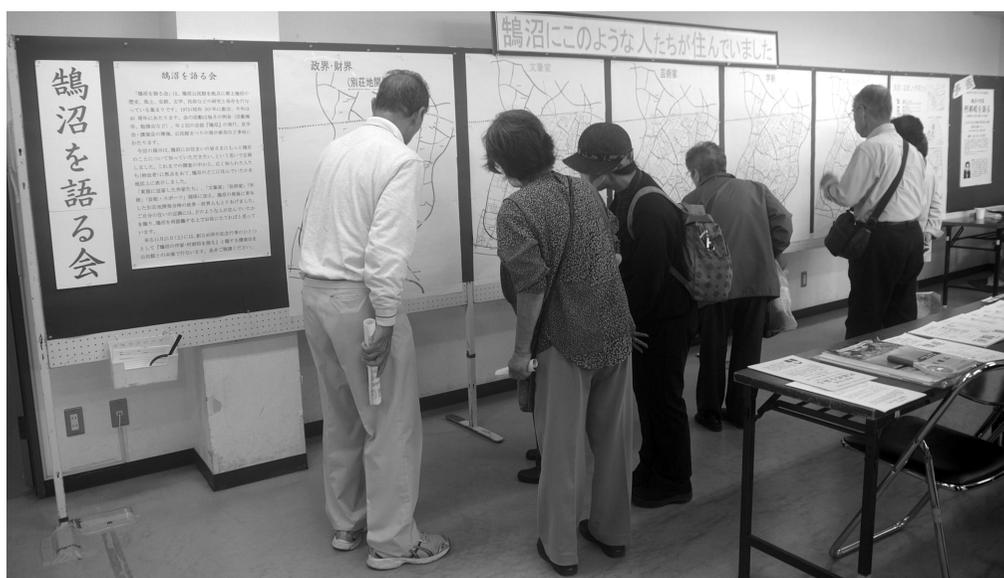
『鵜沼にこのような人たちが住んでいました』

鵜沼を語る会は、鵜沼に住んでいる多くの人たちに、鵜沼のことをもっと知ってもらいたいという趣旨で、今回の展示を企画した。

これまでの調査を基に、鵜沼に居住し広く知られた人たち（物故者）が鵜沼のどこに住んでいたかを地図上に表示した。「東屋に逗留した作家たち」「文筆家」「芸術家」「学術」「芸能・スポーツ」、さらに鵜沼の発展に寄与した別荘地開発当時の「政界・財界人」も加え、活動分野別に展示。来場した多くの人が、自分の住いの近隣にはどのような人が住んでいたかを、熱心に探していた。次ページ以降に、展示でとり上げた人たちを五十音順で記載した。



地図上に旧居住地を表示



自分の近隣にどのような人たちが住んでいたかを、活動分野別地図で熱心に探す

鵜沼に居住した著名人一覧

(物故者 五十音順)

赤木圭一郎	鵜沼藤が谷4-19-29	映画俳優
赤星 四郎	鵜沼桜が岡3丁目の熊倉通り沿い	プロゴルファー
芥川比呂志	鵜沼海岸3-11-5に疎開	新劇俳優
芥川也寸志	東屋近くの貸家「イ-4号」鵜沼海岸2-7-2	作曲家
芥川龍之介	東屋、東屋近くの貸家「イ-4号(鵜沼海岸2-7-2)、鵜沼海岸2-7-18	小説家
渥美 延	鵜沼海岸1丁目	映画女優
阿部 昭	鵜沼松が岡5-3-20	小説家
阿部 次郎	藤が谷2-4 (高瀬邸の離れ)	小説家
安倍 能成	藤が谷2-4 (高瀬邸の離れ)	哲学者
天野芳太郎	鵜沼橋1-10-15	考古学者
荒木襄太郎	鵜沼桜が岡4-6-1	画家
有賀 密夫	鵜沼桜が岡4-9-8	地理学者
安斉 実	鵜沼桜が岡4-5-22 ライフル選手 日本ライフル射撃協会会長 JOC常任委員	
井口小夜子	鵜沼桜が岡4-4-8	歌手
井崎 嘉代	鵜沼松が岡2-14-12	声楽家
磯部 俣	鵜沼松が岡2-5-20	作曲家
伊藤 海彦	鵜沼海岸2-11、2-6	詩人
伊藤 幹一	鵜沼松が岡1~2丁目一帯所有	東京株式取引所常務理事
伊藤 清	鵜沼海岸1-9-2所有	呉服商
伊東将行	鵜沼海岸2-9	鵜沼海岸別荘地の開発
猪俣 浩三	鵜沼松が岡1-16-2	弁護士・政治家
今井 達夫	鵜沼松が岡3-14-9	小説家
岩垂 邦彦	鵜沼松が岡3-1所有	日本電気(株)専務
上田 臥牛	鵜沼橋2-1-13	日本画家
宇野 弘蔵	鵜沼海岸1-8-19	経済学者
宇野 哲人	鵜沼松が岡5丁目 8	歴史学者

江口 渙	鵜沼海岸2丁目	小説家
江口 朴郎	鵜沼桜が岡1-1-7、鵜沼橋2-5-12	歴史学者
小穴 隆一	鵜沼海岸2-7貸別荘イ-2号	画家
大川 橋蔵	鵜沼藤が谷2-10-2	俳優
大久保洋海	鵜沼松が岡1-4-1	仏文学者
多 忠麿	鵜沼海岸1-12-6	雅楽奏者
大島 渚	鵜沼松が岡4-11-5	映画監督
大類 伸	鵜沼松が岡2-16-20	歴史学者
岡田 時彦	鵜沼松が岡2-7-3	映画俳優
大給 近孝	鵜沼松が岡4丁目所有	子爵
織田 幹雄	鵜沼海岸2-11オ-シャンプロムナード湘南	陸上競技
小田柿捨次郎	鵜沼松が岡1-13～15所有	三井物産 常務取締役
尾上菊五郎	鵜沼藤が谷2-10-2	歌舞伎
各務幸一郎	鵜沼松が岡1-4～10所有	東京海上火災(株)社長
各務 鑛三	鵜沼海岸7-18-21	硝子工芸
影山 光洋	鵜沼石上2-4-16	写真家
鹿地 亘	鵜沼桜が岡3-9-13	小説家
加藤 顕清	鵜沼柳小路7200番地	彫刻家
加藤 東一	鵜沼桜が岡2-5-15	画家
加藤 仁平	鵜沼海岸3-8、鵜沼海岸7-10-22	教育史家
金杉英五郎	鵜沼松が岡2-14～15所有	医師
金田 松月	本鵜沼2-3-13	書家
加山 又造	鵜沼松が岡1-10-11にアトリエ	日本画家
川口 芝香	鵜沼松が岡3-18-6	書家
川口 章吾	鵜沼松が岡3-18-6	ハーモニカ奏者
川口松太郎	鵜沼松が岡2-19-10	小説家
川崎 静子	鵜沼海岸2-10-30	声楽家
河田 烈	松が岡2-7-32	政治家
菊本直次郎	鵜沼松が岡1-11	三井銀行初代会長
岸田 劉生	鵜沼松が岡3-23、鵜沼松が岡4-7-10	画家
杵屋五十郎	鵜沼橋通り	邦楽
木下 利吉	鵜沼松が岡2-16、12所有	宮大工、貸し別荘

木下米三郎	鵜沼松が岡2-16、12所有	宮大工、貸し別荘
木村 功	鵜沼桜が岡2-1-29	俳優
木村 正中	鵜沼橋2-5-11	国文学者
葛巻 義敏	鵜沼海岸3-11-5	評論家
邦枝 完二	鵜沼桜が岡2-1-29	小説家
国木田虎雄	鵜沼本村(原)の農家の離れ 鵜沼松が岡4-7 岸田劉生旧居に転居	詩人
黒崎 義介	鵜沼海岸5-1-11	童画家
黒木しのぶ	鵜沼松が岡3-6、鵜沼橋1-5-1	映画女優
小泉 鉄	鵜沼納屋山口紋蔵貸家	小説家
郷 誠之助	鵜沼松が岡4-17～19所有	男爵、実業家
国分勤兵衛	鵜沼海岸2-12	K&K社長
小坂 一也	鵜沼松が岡2-5-25	C&W歌手
五島雄一郎	鵜沼松が岡1-2-14	医学博士
後藤 武夫	鵜沼海岸1-9-5 夫人が常住	帝国興信所設立
小林 哲夫	鵜沼海岸1-4-1	洋画家
小森 和子	鵜沼海岸3丁目、鵜沼桜が岡4-15-15	映画評論家
佐川 英三	鵜沼橋1-11-8	詩人
佐多 芳郎	鵜沼藤が谷2-11-32	画家
佐藤長四郎	鵜沼松が岡2-1所有	薬商
颯田 本眞	鵜沼海岸3-13、鵜沼海岸7-1-7	尼僧
佐分利 信	鵜沼松が岡3-6-2、鵜沼橋1-5-1	映画俳優
忍 節子	鵜沼海岸7-3-3	女優
渋谷 実	鵜沼松が岡2-9-10	映画監督
志摩夕起夫	鵜沼松が岡3-8-13	評論家
子母沢 寛	鵜沼海岸7-15-4、鵜沼松が岡5-1-16	小説家
鯨ノ里一郎	鵜沼桜が岡2丁目在住	力士
シュテルンベルク	鵜沼松が岡4-7松本別荘、鵜沼松が岡3-8	教育者
城 夏子	鵜沼海岸2-2-1	小説家
東海林太郎	鵜沼松が岡3-5-3、鵜沼松が岡1-2-3	流行歌手
白井 喬二	「東屋の離れ3年間静養生活」	小説家
菅沼 五郎	鵜沼松が岡1-22-2	彫刻家

杉 敏介	鵜沼松が岡1-1-19	国文学者
杉浦 非水	本鵜沼2-9-6	図案家
杉原 千畝	鵜沼松が岡3-5-3、鵜沼松が岡1-2-3	元外交官
杉原 幸子	鵜沼松が岡3-5-3、鵜沼松が岡1-2-3	歌人
高木 和男	鵜沼海岸1-15-1	栄養学者
高瀬 三郎	鵜沼藤が谷2-7	実業家
高瀬 弥一	鵜沼藤が谷2-2、鵜沼桜が岡1-5~11	実業家
高橋 元吉	鵜沼松が岡2-9-15倉田健次方	詩人
高見沢 宏	鵜沼松が岡1-15-24	歌手(ダークダックス)
田島比呂子	鵜沼海岸2-17-1	友禅染色家
立原 正秋	短期間鵜沼海岸3-8-10	小説家
田中銀之助	鵜沼海岸2-17赤別荘所有	田中銀行・田中鉱業・日本製鋼所 各取締役
田中 二郎	鵜沼松が岡3-7-6	法曹人
田中 澄江	鵜沼桜が岡4-15-20	劇作家
田中千禾夫	鵜沼桜が岡4-15-20	劇作家
田中 隆尚	鵜沼桜が岡4-15-7、鵜沼桜が岡3-17-23	言語学者
田中平八	鵜沼海岸2-17所有	相場師=田中平八(天下の糸平)の長女 =登羅の婿で三代目平八を継ぐ。糸平不動産・田中鉱山を興す
圭室 諦成	鵜沼海岸3-12-28、桜が岡3-7-15	歴史学者
秩父宮雍仁	鵜沼桜が岡1-1-22で療養生活	皇族
千葉恒次郎	鵜沼松が岡2-7	三井物産石油部門取締役
塚本 茂	鵜沼橋2-13-2	洋画家
塚本 智子	鵜沼橋2-13-1の兄=茂の敷地	声楽家
佃 一豫	鵜沼松が岡2-6所有	日本興業銀行副総裁・南満州鉄道総裁
辻 直四郎	鵜沼松が岡3-8-13	言語学者
椿 貞雄	鵜沼松が岡2-6-16(八軒別荘)	画家
藤堂 高紹	鵜沼海岸2-17所有	伯爵
藤間 嘉雄	鵜沼海岸6-2-5	教育者
徳山 璉	鵜沼橋1-5-1	歌手
内藤千代子	鵜沼松が岡3-20-12	小説家
内藤 彦一	鵜沼海岸1-9-24	松屋百貨店専務

中村錦之助	鵜沼桜が岡3-17-24	俳優
中村武羅夫	鵜沼に居住	小説家
鳴山 草平	鵜沼海岸7-4-26	小説家
南條 範夫	鵜沼松が岡一木通り	小説家
南部圭之助	鵜沼桜が岡2-1-24	映画評論家
新関 良三	鵜沼松が岡5-1-4	独文学者
野呂栄太郎	鵜沼松が岡3-6-12島田いし宅	思想家
碓 伊之助	鵜沼海岸2-16	画家
長谷川一夫	鵜沼松が岡2-19-18	俳優
長谷川巳之吉	鵜沼松が岡1-17-20、鵜沼松が岡3-24-35 鵜沼松が岡4-15-19	評論家
長谷川路可	鵜沼海岸2-7、2-9 (アトリエ住まい)	画家
蜂須賀茂韶	鵜沼海岸2-12所有	東京府知事、貴族院議長 文相、枢密顧問官
服部 静夫	鵜沼海岸3-9、鵜沼松が岡3-5	植物学者
浜田 知章	鵜沼海岸7-20-18	詩人
林 達夫	鵜沼桜が岡2-1-26	評論家
林 巳奈夫	鵜沼桜が岡2-1-26	考古学者
葉山 峻	鵜沼海岸6-2-5	政治家
葉山三千子	鵜沼	映画女優
久松 定謨	鵜沼海岸1-14所有	伯爵
土方 定一	鵜沼海岸2-7、鵜沼藤が谷3-1-18に転居	美術評論家
日吉 早苗	鵜沼海岸3丁目	小説家
廣岡助五郎	鵜沼海岸2-7所有	加島屋貯蓄銀行取締役
広田 弘毅	松が岡1-23-28	元首相
広津 桃子	鵜沼桜が岡3-6-10	小説家
福永陽一郎	本鵜沼3-3-5、鵜沼藤が谷3-2-33	指揮者
逸見 重雄	鵜沼松が岡4-8-1	経済学者
宝生 九郎	鵜沼松が岡3丁目に稽古場	能シテ方
細川芳之助	鵜沼海岸3丁目13	洋紙商、印刷業
馬越 恭平	鵜沼松が岡2-4所有	三井物産、三井呉服店理事 衆院議員

益田 孝	鵜沼松が岡3-22所有	三井財閥最高経営者
松岡 静雄	鵜沼海岸7-18-14	民族学者
松嶋 喜作	鵜沼藤が谷3-10-11	実業家、政治家
松本 直祐	鵜沼松が岡4-7所有（松本陽松園）	呉服太物商
馬淵 聖	鵜沼海岸	画家
真船 豊	鵜沼藤が谷2-10-15	劇作家、作家
水木かおる	鵜沼桜が岡1-4-10	作詞家
三益 愛子	鵜沼松が岡2-19-10	映画女優
宮内 寒彌	鵜沼松が岡2-11-17	小説家
宮崎 寛愛	鵜沼桜が岡4-1	北海道開拓
武者小路実篤	東屋から佐藤別荘に移る	小説家
村川 堅固	鵜沼松が岡5-8一帯	歴史学者
村川堅太郎	鵜沼松が岡5-8-30	歴史学者
森島 守人	鵜沼松が岡3-5-3	政治家
安岡章太郎	鵜沼海岸3丁目8	小説家
矢田 修	鵜沼橋1-16-11	画家
山口寅之輔	鵜沼桜が岡2-6所有	松島苑住宅地開発
吉田 嘉助	鵜沼海岸2-1所有	紙商
吉村鉄之助	鵜沼館（鵜沼海岸2-11）北東に別荘	実業家、政治家

※ 財界人は別荘地開発当時の所有者を主体とした

【事業報告】

鶴沼を語る会創立 40 周年記念講演会

『鶴沼の作家 阿部昭を語る』

2015年11月21日、鶴沼公民館ホールで『鶴沼の作家阿部昭を語る』と題し講演会を行なった。鶴沼を語る会と鶴沼公民館との共催、160名余の来場者があり盛況だった。藤沢市片瀬に50年余在住し阿部昭とも交遊があった作家の佐江衆一氏が、「阿部昭の文学と鶴沼での交遊」について話した。



講師の佐江衆一氏

講演会前半は鶴沼を語る会企画の『阿部昭の鶴沼風景』スライドショー。阿部昭の鶴沼描写の文章と写真集「鶴沼の五十年」を出した福地誠一（故人）の写真を重ね、往年の鶴沼を再現したもので、文章の朗読は持田玉枝会員が担当した。この内容を小冊子にしたものが来場者に配られた。

講師の佐江衆一氏は阿部昭の文学について話した。とりあげた作品は文学新人賞受賞の処女作ともいべき『子供部屋』（1962年）、代表作のひとつ『司令の休暇』（1970年）、毎日文化賞受賞の『千年』（1973年）、芸術選奨新人賞受賞の『人生の一日』（1976年）、短編小説の名手阿部昭のベストセラー『短編小説礼讃』（1986年）。また芥川賞候補になった6作品—『巣を出る』（第50回/1963年下期）『幼



鶴沼地区内外、市外から160名を越える人たちが聴講

年詩篇』（第53回/1965年上期）『月の光』（第55回/1966年上期）『東京の春』（第58回/1967年下期）『未成年』（第60回/1968年下期）『大いなる日』（第61回/1969年上期）を挙げ、作家の視点からみた芥川賞選考の裏話にもふれた。

佐江氏が初めて阿部昭と会ったのは、江の島の

ヨットハーバー。阿部昭から誘いがありヨットハーバーのレストランに赴いた。そこにはもうひとりの作家・立原正秋がいたという。さらに一緒にテニスを楽しんだ思い出など、鶴沼での交遊についてユーモラスな話が続いた。



講演会には阿部夫人と次男の阿部龍二郎氏も出席され、最後に挨拶を戴き閉会となった。

＊

阿部昭（1934～1989年）は54歳の若さで亡くなったが、広島市で生れた翌春には鶴沼に移り、1歳から亡くなるまでのほとんどを鶴沼で過ごした。藤沢市の幼稚園、小・中・高校に通い、東京大学文学部フランス文学科に学んだ。1959年、ラジオ東京（現TBS）に入社、番組制作の仕事の傍ら小説を書いた。1970年発表の海軍軍人だった父親の死の前後を書いた『司令の休暇』が注目を集め、翌年TBSを辞し作家活動に専念する。

阿部作品のテーマは自分の家族を取り上げたものが多く、その舞台は鶴沼で作品の遠景には常に鶴沼風景が出てくる。数多くの小説、エッセーを残し、『阿部昭全作品』全8巻（1984年 福武書店）と『阿部昭集』全14巻（1992年 岩波書店）がある。

（文責：竹内広弥）

来場者アンケート

〈受付記入の来場者 151名の回答〉

- 居住地別は市内90%（鶴沼地区内67% 地区外23%）、市外10%
- 年代別は70代以上が70%、次いで60代が18%
- 周知の方法では鶴沼地区はチラシが一番多く39%、地区外では新聞が34%、市外では44%
- 広報紙の役割も大きく、鶴沼地区では20%、地区外で26%
- 友人・知人を通しての口コミも効果的で地区内で17%、地区外で28%、市外で25%
- 鶴沼地区内からの来場者の7割近くが、公民館での類似の催しに参加している

〈来場者 68名の回答〉

- 講演会についての満足度は、非常に満足56%、やや満足36%、合わせると92%

湘南白百合学園での出張授業

森岡 澄 守谷 俊博（会員）

湘南白百合学園小学校2年生「生活科」の昔の遊びの授業で、鶴沼を語る会に協力依頼がきた。これは平成26年10月に開催された鶴沼地区公民館まつりで展示した「子どもの頃の遊び」のイラストを見たうえでのことである。このイラストの展示と共に遊びを子どもたちに体験させたいという趣旨である。

2年生36人3クラスが対象で、当会では6人のプレリーダーを募り、「あぶり出し」守谷会員、「折紙」浅野会員、「糸でんわ」佐藤和子会員、「紙ヒコーキ」内藤会員、「草木を使っての遊び」柴田会員、「草笛」森岡会員、他に湘南学園幼稚園元主任の青木万理子さんも加わり、「あやとり」を指導してもらった。湘南白百合学園のマスールが手作りしたお手玉は、同学園中学校の父兄である大村さんが担当してくれた。



草木のお面で遊ぶ



あぶり出しを不思議そうにみる子どもたち

あぶり出しを不思議そうにみる子どもたちが早い。浅野さん担当の折紙に佐藤和子さんが助っ人に入り、糸でんわと共に楽しいコーナーになった。「舟」を持っていたはずが、目をつぶっている間に「帆」を持ってしまう「だまし舟」を選んだのは正解だった。内藤さんの紙ヒコーキは良く飛んだ。午後是有田会長が紙ヒコーキの担当を受け継いだ。片瀬の青い空に子どもたちが舞い白い紙ヒコーキが飛ぶ光景が、これからも続いてほしい。

児童文化ではベテランの青木さんの「あやとり」に向かい合った生徒の真剣な

まなざしが印象的。柴田さんの周りには生徒が群がり、残り少なくなった草木の葉で髪飾りをつくり、鏡に自分の姿を映して「きれい!」「可愛い!」とほめ合っている。

一枚の紙、一本の紐、道端の草花など自然の素材が遊びの工夫の取っ掛かりになってくれたら、今日の授業が心に

残ってくれたら、と願ってやまない。鶴沼を語る会の皆にとっても、楽しく忘れられない出張授業の一日であった。 (もりおか きよし・もりや としひろ)



一枚の紙から紙ヒコーキを仕上げる



草木を使っでの遊び — 松葉相撲・草笛・髪飾りなどをつくって楽しんだ



紙ヒコーキのテスト飛行



折紙コーナー

写真撮影：湘南白百合学園小学校 小菅朝子

天皇皇后陛下がご来鶴

2月9日(火)、天皇皇后両陛下が鶴沼へご来臨になられた。両陛下は1月下旬フィリピンご訪問を無事に終えられ、2月5日から10日まで葉山御用邸にご静養に来ておられる間の出来事である。

美智子皇后は鶴沼とゆかりがあり、戦時中、鶴沼松が岡の日清製粉の寮へ疎開し、今の湘南白百合学園小学校に通学されていたことがある。今回のご来鶴は湘南白百合時代からの学友を、ご訪問なさるためだったという。

今までに皇后単独で来られることは何回かあったが、お二人お揃いとは珍しい。御公務の間をぬっての、こうしたお時間がもっともリラックス出来るのであろう。

ゆっくり進む車の窓を開け、沿道の我々に 鶴沼松が岡・天金通りで住民に応える両陛下 向かってお手を振る笑顔が、ことのほか和やかに感じられたのであった。(H. A)



松島苑住宅地 最後の名残の邸を見送って

鶴沼藤が谷・松島苑通りは藤沢から松が岡、海岸方面に通り抜ける道としてよく利用されている。10年ほど前に「山口寅之輔と松島苑住宅地」ということで有田会長とこの一帯の開発について調べたことがあった(会誌95号)。ここは昭和の初め頃、山口寅之輔によって砂原が宅地化、玉石垣で区画され一区画100坪~150坪ほどの分譲地として売り出された。当時北東側の砂丘にあった松林や木々の緑を背景に、東北地方の松島を想わせることから「松島苑」と呼ばれるようになったそうだ。ここを通る道に面して2~3軒毎に棒杭が打っており、そこに1丁目から5丁目までの表示があったとのこと、その間200mほどの距離なので当時の風景が目には浮かぶ。

その後、戦争などを経験し住む人達の移動も見られ、各家の敷地にも変化はあったものの庭々には松も残り、庭木も多く静かな住宅となっている。ここに唯一「松島苑」当時のままの家屋、広い庭、松の木々等を残していたK邸が最近取り壊され、数棟の高さ制限一杯と思われる建売住宅が肩を寄せ合って建ち始めた。何も無くな

コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク

った砂原の上に・・・

これで開発当初の松島苑住宅地は幕を引いたが、早い段階でこの地に住まわれた方々の庭には鵜沼松島苑の風情が残され、落ち着いた町並みとなっている。ここは住民協定も結ばれているので、今後は新旧交じり合いながらより良い住環境が保たれるよう努めてほしい。松島苑に一軒だけ残り、往時の面影を偲ぶことの出来たK邸、その終焉を見届けた一人としていろいろ考えることも多かった。（佐藤和子）

申年に因んで

昭和7年生れ、今年で8回目の申年を迎えました。加齢と共に物忘れが多くなり認知独特の呆け申に近づいている感じです。幼年時の事は記憶にあるものの近年のメカについては十分に指示されながらも翌日には対応するも能わず、悲しい限りです。ましてスマホやパソコンに至ってはまったくお手上げ、今は刻の流れに浮雲の如き存在ながらも依頼されたことは可能な限り手書きで対応するよう努めています。

さて申年に因む言葉ですが、十二支の干支の由来、漢字で書く動物名との違いが大変気になるところです。昔年、時刻、方向を表すのに使用した十二種類の動物に因んだ呼び名というだけで、何故十二種の動物名を使用したか詳しくは知りません。

鬼怒川の猿軍団のさる芝居、犬山市のモンキーセンター、高崎山の猿A・B軍団とかいろいろあります が、世界には何種類ぐらいの猿が存在しているのだろうか。TVで観るモンキーだけでもかなりの種類と思います。

動物の猿とは別にして吾々が平常、口にするサルの拘わる言葉は意外と多くありますね。①病が去る ②敵もさるもの ③去るものは追わず ④さる人が云うところによれば ⑤さる所で起こった事件 ⑥さる筋によれば ⑦さる事実はない ⑧物がくさる ⑨老兵は去るのみ

そして今年は猿のお尻に因んで、赤パンツが魔除けのパンツとして大変売れているとか、申年に因んで思いつくまま記してみました。

最後に会の名前に因んで一句・・・

鵜 (くぐひ)鳥

沼 に降り立ち

を たけびを

語 る鳴き声

会 員集う

(綿谷克延)

コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク

鵠沼の思い出

中島 誠之助(古美術鑑定家)

小学校三年までの幼年時代を神奈川県藤沢市鵠沼海岸で過しているの、私にとって鵠沼の風光は特に思い出深いものがある。松林に延びる砂地の小道をはさんで別荘の竹垣が続き、海岸から望めば江の島がキューピーの寝ているような姿で浮かび、真昼の海はキラキラ輝いている。小田急の駅を降りると鵠沼書店と料亭丸政と鵠沼薬局があり、海岸に向かって商店街が続いていた。

鵠沼や枕に響く土用波

娘の由美が講師を務めるカルチャー教室が横浜で開かれ、生徒の一人から手紙を託されてきたという。生徒と言っても年配のご婦人で、知り合いの有田さんからの言伝ですと渡されたそう。有田さんと言われてピンときたのは、鵠沼時代の同級生のヒロカズちゃんのことだ。文面はまさに有田裕一さんで「もしや中島さんは、あの時の白川誠之助くんではないでしょうか。間違えでしたらばこの手紙は捨ててください」とある。

有田さんの家は鵠沼では老舗に入る商店で、裕一さんは長男で妹が禮子ちゃんの兄妹だ。裕一ちゃんは頭のいい少年なので、私の養母の白川晴子が友達になるようにと望んで、いつも私を有田家へ遊びに行かせていたのだ。だから有田家の間取りから庭の池まで、今でも私はしっかりと記憶に残っている。

そんな有田さんのお蔭で、私は鵠沼とのつながりが五十年ぶりに復活した。懐かしい鵠沼へは、わざわざ新宿駅から小田急で行った。藤沢駅から江の島行の支線に入れば沿線の風景こそ変わっているが、記憶の中の風景と一致する。本鵠沼をすぎれば本真寺の薨が見えてカーブを曲がると鵠沼海岸だ。第三(鵠沼)国民学校へも分校の鵠洋小学校へも、このあたりの道を通っていたのだ。

改札口で有田さんが待っていてくれた。半世紀以上昔の面影は確かに残っているが、お互いなんとなく恥ずかしい感じだ。有田さんのお父さんに召集令状(赤紙)がきて、日の丸を掲げて駅まで送って行ったことを覚えている。あれは戦争の最末期で、敗戦ですぐに帰ってきてその日から店で働いていた姿を思い出した。

有田商店の斜め前あたりにある、柳川という床屋が健在だった。戦前のままの佇まいで、店に入って待合の椅子にもたれたならば一気に幼年時代が蘇った。あ

の日あの時、アメリカ兵が上陸してきて小田急線のホームに英語の駅名が書かれた。それまで英語は敵性用語で禁止されていたから、子供心にも戦争に負けたことが現実となった。華族や財閥の立派な別荘が次々と接収されて、門柱に黄色のペンキでF1と番号が書かれた。F16まで記憶しているから、多分十六軒の別荘が占領軍将校の宿舎になったのだろう。

ずぶ濡れの着物掘り出す敗戦忌

デパ地下に美食あふれて終戦日

敗戦直後は極度の食糧難で、毎日の食べるものが尽きていた。夕方近くになると「セイちゃん、ザンパン貰っておいで」とごはん蒸し器を持たされて、接収された別荘の裏口に町の人たちと並んだ。日が暮れると占領軍に雇われている顔見知りのメイドさんが、こっそりとアメリカ兵の食べ残した食事カスを鍋や鉢に分けてくれる。

戦争中の毎日、まともな食べ物を口にすることがなかったものだから、この残飯のなんと美味しさだったことか。私は食べたことのない洋食で頭がボーッとした。だから、あれから七十年も経つというのに「ザンパン」という言葉を口にしたりにただけで、いまだに条件反射でベロの下から、唾がジワッと湧き上がるのだ。

仕立屋の息子の飯田キコにも会った。父親が別荘の広田弘毅のお出入りで、畏れ多いから弘毅を逆にして名前を頂いたのだと初めて聞いた。牛乳屋の浜野ユウゾウもいた。彼と電気屋のタカサキには、私はいつもいじめられた。皆で一緒に鶴沼名物のシラス丼を食べて、時の過ぎるのも忘れて話し込んだ。だけど私はザンパンのことは言わなかった。あまりにも悲惨な話だったからだ。

(なかじま せいすけ)



中島誠之助氏は、この原稿を会誌『鶴沼』に寄稿されると共に、産経新聞に『鶴沼』第111号—特集 戦後70年…終戦前後の記憶—を読んでの思いを寄稿されました。2月19日の産経新聞朝刊神奈川紙面に大きくとり上げられているので、次ページに紹介します。

(編集部)

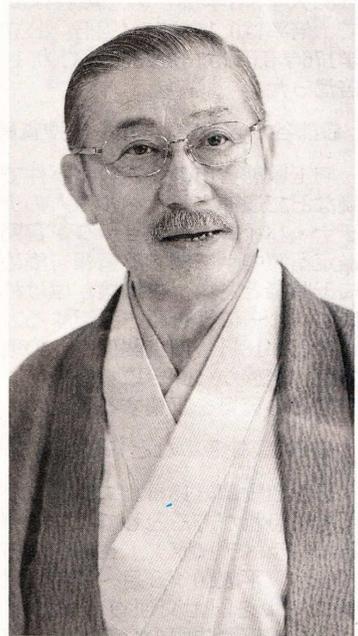
小冊子「鶴沼」111号



藤沢市の市民グループ「鶴沼を語る会」が昨秋刊行した小冊子「鶴沼 特集 戦後70年」を読んだ古美術鑑定家、中島誠之助さん(77)から「その内容をぜひ紹介したい」と本紙に原稿が寄せられた。昨年の戦後70年で痛感させられたのは戦争体験者の高齢化。証言収集の試みにもタイムリミットが迫る。中島さんの「戦後80年に私たちはもういない」という言葉がずしりと重い。

藤沢市民グループの小冊子を読んで

鶴沼の終戦前後を知って



< なかじま・せいのすけ > 昭和13年、東京生まれ。1歳の時に鶴沼に移住して幼少期を過ごした。『開運!なんでも鑑定団』(テレビ東京)に出演中。東京・青山の「骨董通り」の名付け親。

私は幼年時代を藤沢市鶴沼海岸で過ごしている。だが、地元在住の竹馬の友から送られてきたホットキス止めの小冊子「鶴沼」の特集「戦後70年：終戦前後の記憶」には、私の知らなかったことがたくさん記されていた。

湘南海岸を上陸地点と想定したアメリカ軍による「コロナネット作戦」の発動予定日は昭和21年3月1日。戦争が長引けば、辻堂と鶴沼は「日本のノルマンディー」になっていたのだという。最前線になるかもしれない海岸地帯で、敗戦をはさんで数年間を暮らした人々の生活が、冊子には生々しくつづられている。

古美術鑑定家 中島誠之助

私たちはより少し上の世代には、終戦時のことは思い出しにくいという人が多い。軍国少年・軍国少女から占領下の民主主義へ、価値観の激変でつらい時期を送ったからだろう。しかし、いま語らなければという決意のもとに寄稿された文章が並ぶ。

学校の行き帰りに戦闘機に機銃掃射された少年たちは、逃げ回りながらも「俺の鼻先で屁こくな!」と明るい。長崎に疎開した少年は原爆に遭遇した惨状を記す。大人たちと玉音放送を聞いた体験談がある。夜に明かりをつけて家族と過ごせる毎日のうれしさが語られる。鶴沼に進駐した米軍は邸宅を次々と接收して

将校用の宿舎にしていく。子供たちはチューインガムをもらい、その甘さにアメリカを嗅ぐ。

冊子を読み通すと、戦争を体験した人々の、語り尽くせない思いまで伝わってきた気がした。次の区切りとなる戦後80年を迎えるとき、私たちはもういないかもしれない。いま、平和の大切さを伝えなければならぬという強い信念が、全編に満ちている。

(寄稿)

◇ 小冊子「鶴沼」についての問い合わせは、鶴沼を語る会 (<http://kugenuma.sakuran.e.jp/>) へ。

伊藤 聖さん 追悼

編集部

川上恵久会長が現役のまま急逝された平成 14 (2002) 年 3 月、残された会長任期約 1 年 2 ヶ月の間、会長を務められた伊藤聖 (当時副会長) 会員が 2015 年 10 月 28 日に逝去された。享年 87 歳であった。

伊藤さんがいつ鶴沼を語る会に入会されたか明確な記録はないのだが、1998 年以前であることは間違いない。会誌『鶴沼』投稿の初出は第 77 号 (1998/9/30 刊) 「クゲヌマエンシスと呼ばれる小さなエビの話」であり、最後の原稿は第 91 号 (2005/11/30 刊) 「昭和 21 年 6 月 - 23 年 12 月の金銭出納簿」であるからだ。

この 7 年の間に文学、美術、自然科学、建築など多方面に関する研究のほか古
老座談会司会記事も執筆、例会通知 (はがき印刷) の作成、郵送もされた。

会誌『鶴沼』をきちんとした定期刊行物の体裁に整えられたのは故鈴木三男吉
さんで第 75 号からだ。伊藤さんは原稿収集、活字化、編集校正に尽力され鈴木
編集長を補佐された。というのも伊藤さんは、もと朝日新聞社会部・学芸部の記
者であり、詩人でもあったから編集作業はお手の物だったのである。

詩人としてのペンネームを「古志秋彦」といい、矢内原伊作らが創刊した詩の
最も権威ある同人誌の一つ『同時代』に 1980 年代から同人に迎えられていた。

旧制湘南中学校、東京高等師範学校数学科を卒業し県立藤沢高校、県立平塚江
南高校の数学教師になった。藤沢高校は前身が女学校だったから男女共学は名ば
かりで当時は男子生徒が一人もない女の園であったから紅顔白皙の青年教師は、
たちまち全校生徒憧れの的となった。ちなみに伊藤夫人は当時の教え子である。

しかし伊藤さんは文学を志し教職を捨てて東京大学仏文科を卒業したという文
系理系双方の才能を合わせ持つ異才であった。

その異才ぶりは 7 冊の詩集の題名を見れば一目瞭然である。それは『海の原点』
(1977)、『ある空間論』(1982) 以上木鐸社刊。『パスカル頌』(1991)、『数学科学生』
(1995)、『ルベーグ積分序説』(1999)、『不完全性定理』(2003)、『リーマン予想』
(2010) 以上舷燈社刊というもので、伊藤さんの詩には素数、関数、無理数、数列、
代数式や代数記号を用いた定理や公式が頻出するのだ。詩集がある賞の候補にな
ったとき、これが詩といえるかと選考委員の間で論争になったそうだ。

伊藤さんは 1928 年に新潟県で生まれ、職業軍人だった父親の転属によって満州

の公主嶺に渡り、そこで小学校時代を過ごした。本国内の中学へ入るため祖母と二人で帰国、上京する汽車の中で知り合った乗客に「どこかいいところはないか」と訊いたところ「鶴沼がいい」と教えられ藤沢で途中下車したのが鶴沼に住み着くきっかけになった——とはウソのようなホントの話という。

2005年夏、脳梗塞発症。頸動脈にも梗塞部が見付かりステント挿入手術を受けた、その発症からの経緯を『同時代』同人の機関紙に次のように書かれている。

脳梗塞の記

古志 秋彦

それはまったく予期しない突然の出来事だった。最初は何が起きているのか事態が飲み込めず、そのため何一つ適切な処置が取れなかった。今になってみると「あれが前兆だった」と思い当たるが、その時は何も手に付かなかった。後で聞いてみると誰もがそうだったとのこと、うろたえたのは自分一人ではなかった。時間的な経過も、後になって整理してみたの記録だから当てにならない。

7月18日の夜、何となく足元が定まらないというか、ふらふらと船酔いのような気分がして、早めに床に着いた。このところ過労気味だったから、一晚休めば回復するだろうと、まだその時は事態の深刻さに気付いていなかった。ただコピーを取ろうとすると何回やっても出来ず、どうしてなのかなと諦めてしまったが、紙を入れなくてボタンを押していたことには気が付かなかった。

19日は一日休んで寝ていたが、翌日になっても病院に行こうとしないので、家内が見かねて「明日は病院に行っちゃんと診てもらいなさい」と21日朝、無理に家から送り出された。何となく足元が不安定な様子なので「付いていきましょうか」と家内は声をかけたというが、その記憶はない。

駅に着いてみて初めて深刻な現実に直面することになった。どうやって切符を買っていいか分からないのである。お金をどこに入れたらいいのか、どのボタンを押したらいいのか、お金とボタンとどちらが先か、とにかく順序だてて考えることができなかった。

しばらく券売機の前で途方に暮れたまま立ち尽くしていた。そこにいた女のの人に300円を渡して切符を買ってもらった。変な人だと思ったことだろう。どうやって病院にたどり着いたのか、いまでもよく分からない。

内科の予診ですぐCTスキャンに回され「左側頭葉に梗塞の疑いがある」と診断された。この時点で「かなり梗塞の範囲は大きそうだ」といわれ、ある程度、麻痺が残ることを覚悟した。一週間後の27日、改めて精密検査を受け、脳の太い血

管が詰まって起きる「アテローム血栓性脳梗塞」と診断された。

幸運だったのは、言語中枢と運動神経が集中している左側頭葉のダメージが少なかったことであった。言葉のもつれと手足の不自由さは幾分残ったが、日常生活に支障をきたすほどではなかった。ただ文字が全く書けなくなった。字の形は思い出せるのだが、手のほうが思うように動いてくれないから、字の体裁にならず、みみずが這ったような文字しか書けなかった。

意識や麻痺の状態は、発症後 2~4 日後に最悪になることが多いという。その意味では、ぐずぐずして様子を見ていたのは最低の対応だったわけだ。しかし救急車を呼んで病院に行くという判断を、自分で適切に下せるかということ、それはかなり難しいのではないだろうか。なにしろ経験したことがない事態に直面することになるわけだからである。私なども CT スキャンの写真を見せられて、初めて「これが脳梗塞ということなのか」と納得した次第である。

8 月 9 日と 10 日、あらためて心臓エコー、MRI、CT スキャンなどの検査を受け、更に後日、血管カテーテル検査を受けた結果、左側頭葉の梗塞が血栓によって引き起こされていること、また右頸動脈に動脈硬化による狭窄があることが分かった。この狭窄部分は約 8 割がふさがり 2 割で血流が確保されているという状態で、このままだと再発の危険があるとのことであった。

主治医からは「カテーテルによるステント治療」が現在のところ最善の方法であると勧められ、その方法についての説明があった。ステントというのは血管内に網目状の金属チューブを固定して血管壁を保護するもの。

3 週間後の 10 月 4 日入院。5 日に鼠蹊部から頸動脈まで血管カテーテルを通してのステント装着、24 時間の経過を見て、無事に退院できた。発症以来、約 80 日の闘病生活であった。

なお私が治療を受けたのは湘南鎌倉総合病院（鎌倉市山崎）で、このステント治療では中心的な医療機関となっている。

（『黒の会通信』No26 号 2005 年 12 月発行より：ご遺族の許可を得て転載）

* 編集注：湘南鎌倉総合病院は現在鎌倉市岡本に移っている。

伊藤さんはこの手術後より徐々に外出を控えるようになり、鶴沼を語る会の例会も欠席されるようになったのであった。

戒名：見山聖性居士 ご冥福をお祈り申し上げます。



昭和初期の住宅地 (第 0316 話)

渡部 瞭

『現在の藤澤』に紹介された住宅地

1933(昭和8)年に刊行された加藤徳右衛門編著になる『現在の藤澤』には、以下のような新しい住宅地が開発されていることが紹介されている。

1	松島苑	鶴沼東部海岸	事務所	鶴沼南部海岸	有田金八
2	上岡住宅地	鶴沼本村小田急本鶴沼驛附近	事務所	鶴沼西部海岸	加藤徳太郎
3	藤ヶ谷住宅地	鶴沼、江之島電鐵高砂停留所附近	事務所	鶴沼南部海岸	有田金八
4	高松通住宅地	鶴沼高松通附近	地主	鶴沼中東	高松良夫
5	中東新道住宅地	鶴沼中東通附近	地主	鶴沼中東	高松良夫
6	高瀬住宅地	鶴沼橋町通り附近、高瀬通り附近	地主	鶴沼高瀬通り	高瀬弥一
7	藤ヶ谷住宅地	鶴沼、江之島電沿線	事務所	藤澤領家	田中勇吉
8	鶴沼海岸別荘地	鶴沼海岸観光道路附近	地主	鶴沼南部海岸	伊東縫子
9	鶴沼海濱別荘地	鶴沼海岸観光道路附近	地主	鶴沼南部海岸	田中耕太郎
10	花澤町住宅地	藤澤驛南口	地主	藤澤町藏前	榎本市右衛門
11	花澤町住宅地	藤澤驛南口	地主	鶴沼宿庭	關根守太
12	花澤町住宅地	藤澤驛南口	地主	鶴沼宿庭	山上八造
13	花澤町住宅地	藤澤驛南口	地主	鶴沼苺田	斎藤 保
14	鶴沼林間別荘地	鶴沼海岸驛附近	地主	鶴沼中部海岸	關根善太郎
15	一本松住宅地	鶴沼大東新道附近	地主	鶴沼苺田	關根國松
16	大東別荘地	鶴沼大東新道附近	地主	鶴沼宿庭	關根守太
17	富士見丘住宅地	鶴沼南部海岸	地主	鶴沼海岸	伊東ぬい
18	藤ヶ谷別荘住宅地	鶴沼南部藤ヶ谷橋通り	地主	東京市銀座三丁目	木村泰治

これら以外に「柳小路住宅地」(第 0224 話)や「濱見山分譲地」も、この時代に開発された住宅地である。

松島苑

《松島苑》については第 0294 話で紹介したように、現在の鵜沼桜が岡二丁目東部、旧小字名では上岡の北部一帯にあたり、山口寅之輔(高瀬三郎の末弟とも従兄弟ともいわれる)によって有田金八が 1920(大正 9)年に大給子爵から購入した土地を開発したものである。現在の上岡バス停南方から高瀬新道から別れて江ノ電鵜沼駅方向に向かう道(山口通りと呼ばれた)を敷設し、その両側を 100~150 坪位に整然と区画して区画毎に玉石垣が積まれた。分譲地としての体をなしたのは 1932(昭和 7)年頃、ほぼ完売したのは 1939(昭和 14)年頃といわれている。

松島苑住宅地(第 0294 話)

山口寅之輔と松島苑住宅地 《松島苑》とは一般の地図には記載されていないが、鵜沼地区を営業範囲にしているタクシー運転手なら認識しているという程度の地名である。江ノ電バス高根線の「上岡」バス停から東に分岐し、江ノ電鵜沼駅方向に向かう道の両側、現在の住居表示では鵜沼桜が岡一丁目と鵜沼藤が谷四丁目にまたがる。かつてこの北側には《高砂》と呼ばれる海拔 18m 程度の砂丘の高まりがあり、子どもたちの砂滑りの遊び場になっていた。また、桃畑も多く、はるばる村岡方面からも花見客が訪れたと山川菊榮が『我が住む村』(1943)に記している。

ここは大給子爵の土地を伊東将行と木下兄弟が開発した日本初の大型別荘分譲地《鵜沼海岸別荘地》の北側に隣接する。鵜沼海岸別荘地開発(第 0205 話)は、1920(大正 9)年には一つのエポックを迎えたのではなかろうか。

《松島苑》の名はかろうじて地元民に知られているが、その由来を知る人は少ない。江ノ電鵜沼駅近くに住んでいた松嶋喜作氏(証券業、戦後 2 代目の参議院副議長)が開いたとよくいわれるが、そのようなことはない。

有田裕一氏・佐藤和子氏が「山口寅之輔と松島苑住宅地」と題して『鵜沼』第 89 号に調査報告を掲載されているので、その主要部分を要約しよう。

- 開発した人は山口寅之輔である。
- 分譲販売の事務所は有田金八(当時町会議員)が引き受けていたようだ。

- 大正 15 年大日本町村全国図刊行会発行の明細地図では松島苑の区画は見られないが、昭和 5 年発行のものにはきちんとした区画が入っている。
- 同年の『大藤澤復興市街圖』にも松島苑として大きな表示があり、その入口付近には山口町の町名も見られる。
- 昭和 14 年の地図では整備が進み、ほぼ現在のような形になっている。
- 区画は 100～150 坪位、1 坪 5 円ほどだった。
- この住宅地売り出しの頃、住宅地入口(現鵜沼藤が谷 3-12-25 と 3-13-15 との間の道) にアーチが建っていた記憶があると聞いている。そのアーチには“松島苑入口”という字が書いてあった。
- 昭和 7 年前後、住宅地内の整備が進み、今でも鵜沼の至る所に見られるように区画毎に玉石垣が積まれた。その中に松苗が植ええられるようになった頃、北東側砂丘の松や木々の緑を背景に、東北の松島を思わせる構想からか《松島苑》と呼ばれるようになったそうだ。
- この住宅地には最初からガス・水道が入っていた。
- 藤沢駅南口より高瀬通り、宮崎通りを経てさらにこの松島苑内の山口通りから、通称海岸通り(江ノ電鵜沼駅から海岸へ向かう道)の大曲の四つ角のところまで一時期江ノ電の乗合自動車が走っていた。
- 松島苑住宅地の通りに面した家 2～3 軒毎の角に棒杭が打ってあって、そこに松島苑 1 丁目～5 丁目までの表示があった。

上岡住宅地

これについても、旧小字の上岡の北部と思われるが未調査である。加藤徳太郎というのは仲東の現鵜沼桜が岡二丁目、藤澤警察署南方に現在も「大勝」の屋号で営業する建築業者である。明治時代以来浜野林蔵(通称 林大工＝りんだいく)、屋号は「大林(だいらん)」と並ぶ鵜沼村の名大工で、この二人が皇大神宮人形山車制作を分け合ったほどである。大正期から戦後しばらくは本拠を鵜沼海岸三丁目に移して別荘地の開発に力を置いた。

藤ヶ谷別荘住宅地

ここは大給子爵の土地を伊東將行と木下兄弟が開発した日本初の大型別荘分譲地《鵜沼海岸別荘地》の北東側にあたると思われるが、調査していない。木村泰治という人物についても未調査である。ただ、分譲斡旋は有田金八が取り扱っていたらしい。

高松通住宅地・中東新道住宅地

いずれも鵜沼村最後の町長であり、藤澤町初代町長を務めた高松良夫の開発による。高松家(第 0033 話)は鵜沼きっての名家で、平安時代以来の伝統を持つ旧家である。

「高松通住宅地」は、現鵜沼桜が岡四丁目、旧小字では川袋の西部にあたる砂丘一帯で、中腹は桃畑だった。高瀬新道を敷設するとき土地を提供し、「高松通」の地名が生まれた。まさに我が家があるのもこの一角である。

「中東新道住宅地」は、大東道の続きでクランク状に曲がった先の小田急線に平行する両側と思われる。

高瀬住宅地

高瀬彌一の開発になるもので、川袋高瀬邸と藤沢橋通郵便局の間一帯を区画整理して分譲したもの。江ノ電高砂停留所(現石上駅)に隣接していたので、交通アクセスは至便であった。ここは横須賀鎮守府の将校に人気があったらしく、かなりの海軍軍人が購入した。

ただ、残念なのは旧江之島裏街道が区画整理のため不明になったことである。

鵜沼海岸別荘住宅地・富士見丘住宅地

いずれも伊東縫子の開発ということになっている。彼女は伊東將行夫人である。1920(大正 9)年の將行没後、長谷川家に譲った旅館《東屋》敷地以外の伊東家所有地に貸別荘を建て、《イの〇号》と番号をつけて貸し出した。イとは伊東將行の頭文字と思われるが、一般には東屋の貸別荘と認識されていたようである。《イの 1 号》は、旅館東屋の西方、現在の鵜沼市民センター裏門を出た右手向かいにあり、伊東將行の隠居所として建てられたらしい。ここは 1933(昭和 8)年、伊東縫子と娘=政子夫妻が「鵜沼ホテル」を開き、戦後、1950(昭和 25)年に孫で養子となって伊東家を嗣いだ伊東將治によって割烹料亭《東家》が開かれた。《イの 2 号》から《イの 4 号》は旅館東屋の北側に並んで建てられ、《イの 4 号》には芥川龍之介が、《イの 2 号》には小穴隆一が 1926(大正 15~昭和元)年、短期間住んだ。《イの 2 号》には秋田雨雀が住んだという話もある。これらの貸し別荘は《イの 13 号》までであったことは判明しているが、「鵜沼海岸別荘住宅地」の名がそれら全てを含むものか、一部は「富士見丘住宅地」に分類されていたものかは判らない。「富士見丘住宅地」とは何かについて記載されたものが見当たらないのである。

鵜沼海浜別荘地

この「鵜沼海浜別荘地」とは中屋の別荘として知られていたもので、中屋旅館の南側に、共同井戸のある中庭を挟んで6軒ほど並んでいたという。中屋旅館を開いた田中安の長男は田中耕太郎である(同姓同名の法学者が辻堂に在住していた。こちらの方がはるかに有名人なので混同されやすい)。

田中 安・カネ(第 0172 話抜粋) 田中 安(たなか やす 1851.12-?) 田中倉吉の長男。石油元売り田安商事(株)を創業。東京市四谷区北伊賀町4丁目に住み、鵜沼別荘前の鵜沼海岸2-6 對江館(待潮館)を購入、中屋旅館として営業。土地を広く購入して貸店舗・貸別荘・貸家を手広く経営。

花沢町

藤沢駅南西方、現鵜沼花沢町の範囲で、昭和に入って開発された。

花沢通りと花沢町(第 0278 話) 藤澤停車場には鉄道開通の1887(明治20)年当時は北口しかなく、1902(明治35)年の江之島電気鐵道開通によって南口ができたが、南側は人家はまばらだったらしい。第0256話で紹介した《私立湘南実科女学校》が本校舎に移転した1923(大正12)年5月当時、校舎の裏(西)側には松の生えた砂丘があった。

大東の古老、故関根佐一郎氏の記憶では、「聖天松原」といい、「これは藤沢と鵜沼の丁度境に当たる所で今の藤沢駅のところ。これは聞いた話だが最初、鉄道省は藤沢駅を陣屋小路に作る予定であったが、煙を吐くものは嫌いということで住民の反対にあい聖天松原になった。ここなら人がいないから反対は起きなかった。このため大船駅と藤沢駅の間に大きなカーブが生じることになった。

藤沢駅の南、花沢町ではウサギが飛び跳ねていた。花沢町といえば、鵜沼中の砂丘の続きがあって、そこは関根本家の山だった。大船駅を作るときに藤沢駅から引込み線を敷いてトロッコで砂を運んだ。大船駅の所は川が流れており、地盤がグズグズしていたので基礎が上手くできない。砂を入れると地盤がしまるので本家の山の砂を全部持って行った。その時、鎌倉時代、多分、新田義貞の頃のカブトが砂の中から出てきた。このカブトは関根本家に祀ってある。」という。

こういう状態の藤澤停車場南側に宅地開発が行われたのは、震災復興期のことらしい。

藤沢市史年表には、1927(昭和2)年12月4日に「鵜沼の花沢通り開通。花沢町、町内会を組織」とある。

また、花沢町町内会が1939(昭和14)年に建てた《下水敷設記念碑》によれば、「花沢町ハ大正十二年關東大震災直後ヨリ漸次開發セラレ昭和二年始メテ町内會を組織シ」とある。

この《花沢通り》がどの道路を指すのか明確な調査は行っていないが、おそらく花沢町の中央を南北に貫くやや広い道のことだろう。

鶴沼林間別荘地

この別荘地開発については見当もつかない。ただ開発者名として挙がっている関根善太郎の自宅は有田商店脇から仲通りを、小田急線踏切を渡ってすぐ右側にあった。

「林間別荘地」というネーミングは、小田急が江ノ島線開通に際して創始した「林間都市開発」に影響されてのものと考えられる。「林間都市開発」とは、震災前盛んになった「田園都市開発」に触発された郊外都市開発計画で、高座郡大野村上鶴間（現相模原市南区）と同郡大和村下鶴間（現大和市）にまたがる小田急江ノ島線沿線に、宅地や野球場、ラグビー場などをつくり、さらには相撲部屋や松竹の撮影場などを誘致しようとしたもの。江ノ島線に東林間都市駅、中央林間都市駅、南林間都市駅（いずれも現在は駅名に「都市」がついていない）を設置した後、宅地の分譲を開始して、購入者には3年間の無賃乗車特典を付ける等の購入意欲を盛り上げるような販売戦略を行った。当時としては都心から遠すぎたことや、小田急沿線でも成城など他の宅地開発があったことから思うように分譲が進まなかった。

「田園都市」とは、1898(明治31)年にイギリスのエベネザー・ハワードが提唱した新しい都市形態で、日本では1907(明治40)年に内務省地方局有志により『田園都市』が刊行されハワードの理念が紹介された。これを受けて、先ず関西で小林一三が経営する阪急電鉄が1910(明治43)年に池田駅近郊の室町、翌年に桜井駅（箕面市）など沿線周辺の宅地分譲を行い噴水やロータリーを設けた「田園都市」を相次いで開発した。東京では渋沢栄一らが1918(大正7)年に田園都市株式会社を設立し、洗足や田園調布を噴水やロータリーを設けた「田園都市」を分譲開発し、首都圏を代表する高級住宅地として、漫才のネタにもなるほどの成功を得た。神奈川県内でも、1922(大正11)年に《大船田園都市(株)》が設立され、「新鎌倉」都市計画が進められたが、関東大震災によって頓挫し、1928(昭和3)年に放棄された。

一本松住宅地

一本松は現在も小田急跨線橋下の JR 東海道線踏切に名を残す地名で、かつて(戦後までであったというが、私の記憶にはない)踏切の南西側に一本のクロマツの巨木があったことによる。おそらくこの踏切から南下する大東道の新道開発による区画整理で開発された分譲地と思われるが、詳細は未調査である。

開発者として挙げられている関根国松とは、苅田の藩問屋《諸國》の当主である。

大東別荘地

これも大東道の新道開発による区画整理で開発された分譲地と思われるが、詳細は未調査である。開発者として挙げられている関根守太とは、宿庭の地主で、新道開通記念碑によれば、163 坪と最大の土地を寄付している。

濱見山分譲地

大藤澤復興市街圖に日の出橋の西側、現鵜沼海岸四丁目から辻堂東一帯は松島苑より広く薄赤で塗りつぶされ、「濱見山分譲地」と記入されている。

柳小路住宅地(第 0224 話)

柳小路停車場 この位置は、江之島電気鐵道開設当時には、脇を曲流した片瀬川が並行して流れていた。1917(大正 6)年 9 月 30 日の出水でショートカットが行われ、現在の流路が確定した。しかし、大水の度に旧流路を突進した水は、江ノ電の土手を突き崩したりしている。

江戸時代にはさらに西方まで片瀬川は深く曲流していたらしく、高座・鎌倉郡境線はここで不自然なほど屈曲している。これが片瀬川の旧流路を示すのかどうかは、それを示す絵図などがあれば明確になるが、残念ながら見たことがない。

この屈曲部の鎌倉郡側の小字名が桜小路である。現在は公園の名にかろうじて残っている。この桜小路になぞらえて柳小路の停車場名がつけられたのだろう(第 0208 話)。この地域の開発は比較的新しいため、大した調査はなされてこなかった。『鵜沼』第 56 号に「わがまちミニ紹介シリーズ 柳小路」というがあるので、そこから引用しよう。

「柳小路の名は、長妻さんの家のまわりにあった柳の木が目印となり、町の名前となりました。このあたりは、境川が拡がって、川か沼かわからない地形でした。大正 11 年にはじめて別荘を建てて住みついたので、中根さんはじめ 3 軒でし

た。翌大正 12 年の震災では、津波は来なかったが、別荘はつぶれ、けが人も出ました。

この近くには、百両山のような松の繁った大きな砂山や、小さな砂山がいくもあって、松露や初茸がたくさん採れました。海水浴はこの砂山をこえ、鶴沼海岸まで歩いたものです。

境川では鮎が釣れ、鰻が捕れました。長妻さんの家のそばには、川が流れ沼があり、釣りもできました。付近一帯は地盤が低く境川の土手が切れるたびに、床下浸水でした。

戦時中は、空襲で家を焼かれた人や疎開などで転居者がふえ、戦後は江ノ電が貸家を建てるなど、家もふえ店もできました。

町が現在の形に落ちついたのは、昭和 30 年の頃です。今では、柳小路だけで五百世帯になり、気軽に話し合いのできる明るい町作りに励んでいます。」

(わたなべ りょう)



『鶴沼を巡る千一話』は 4 年前に召天した渡部瞭さん(鶴沼を語る会副会長＝当時)が、体調を崩した中で懸命に書き綴ったものです。千話を書き上げるべく、入院先にも PC、資料などを持ち込み作業を続けたが、残念ながら第 0332 話で終わりました。

これらの話は自身のHPに掲載していましたが、ゆくゆくは会誌『鶴沼』に載せたいと常日頃言っていました。千一話の第 0001 話は地理の専門家らしく、鶴沼の地形に焦点を当てた『海岸平野の砂丘列』、最期となった第 0332 話は鶴沼住人にとってなじみ深い『一木通り』でした。

今回、本人の意思を引き継ぎ、書き上げた話の中から任意に選び、会誌『鶴沼』に載せることにしました。いくつかの話が関連するので、編集部で調整し掲載したいと思います。

(編集部)

幻 聴

今井 達夫

生き残りのこおろぎの鳴き声を聞いたのは久しぶりのことだ、と耳をすました馬座は、すぐそれが幻聴であることを悟った。季節がちがうのだ。もう晩春の候で、まさか今ごろまで生き残って鳴くやつもあるまいと、常識が教えるのである。

カゼをひいてたのんだ医者が肺炎になるのを予防するためストマイを打ちましようといったとき、それは初物だなと野次馬的関心を示したのは、十年前であった。そのすすめに応じて、二本打ったおかげで肺炎はまぬがれたが、その代わりとっては医者に失礼だが神経性難聴というのに取りつかれた。それがときどきそういう幻聴を誘い出す癖をつけてしまったと馬座は素人自己診断をしているのだが、その上、脳卒中で倒れてからそれはますます頻度を加えたようであった。ただし、現在の幻聴がどちらに原因を持っているかは判断しかねた。それぞれが原因になる場合があって、医者にも判断はつくまいと勝手にきめてかかり訊いても見ないことにしているのである。

もうひとついえば、不意に訪れて来るさまざまな幻聴を、そのさまざまな種類を楽しんで待ちうけているところもあった。

ひとこと説明させていただけば、現在の彼は長い病院生活で生命びろいはしたものの右半身不随が残り、近所まわりの散歩ぐらいはできても他出不自由な状態のままなのである。だから、友人たちの来訪をよろこぶのと同じように幻聴の訪れを楽しんでもいるのであった。ただし、訪れて来る幻聴はどちらかといえば、ノーマルなものといえた。幻聴にノーマルもおかしいが、それがさまざまな音にかざられていて人間の言葉にまで発展しないのを、これも素人自己診断でそう決めているのである。

物音にもさまざまな種類があった。生きのこりのこおろぎの鳴き声もそのひとつだが、海鳴りや松籟が聞こえると馬座はそのたびに妻に訊いてみなければならぬ。難聴ではあるが全然聞こえないわけではなく、テレビやラジオなどイヤホンの助けを借りれば十分聞き取り聞き分けることが出来、対人会話は相手の声の種類によってはほとんど不自由ない程度である。だから、海鳴りや松籟が本物かどうか迷うのである。馬座は何気ない顔でつぶやいてみる。

「今夜の海鳴りは相当なものだな。」

すると、返事は二種類になる。

「そうね、荒れてるのね、」

そういうとき、妻は耳をかたむける表情を見せる。

「あら、あたしには聞こえないわ。空耳じゃない？」

否定するときも妻は率直であった。馬座の気質を承知しているからである。うっかりお座なりをいえば、途端に機嫌の悪くなるのを心得ているのだ。病気についても同様で、入院当初の重篤状態にあった時期が過ぎると、馬座は自分の病状に関しては気休めや慰めを否定し真実を求めた。そんなことでごまかされるのを嫌うのは、むしろ仕事柄真実を追及する平常心ともいうべきで、それを昔から病的とさえ指摘している周囲もあった。

こおろぎの場合も、馬座は一度それを口に出してからすぐ空耳であることを自ら説明した。

「まさかね、今ごろまで生き残っているやつがいるはずないし、生き残っていたとしても今ごろ突然鳴きだすわけではないからね。」

「そうね。それで、今でも鳴いているの？」

「ウン、いや、余計なことをいうな。そんなこというから、こおろぎのやつ、やめちまったじゃないか。」

「フッフ。勝手なこおろぎね。」

「ウン、こんど鳴いたら、どのくらい続けるか試してやろう。」

しかし、そんなふうにもいつも幻聴を話題に持ち出すのではなかった。いや、むしろ口に出す前に消え去り忘れてしまう場合の方が多かったが、ことし二度訪れた同じ幻聴を話題にしなかったについては、やや複雑な心理の翳があった。一度目はこおろぎの鳴き声の直前であり、二度目は直後のことだ。二度とも近い友人の死と結びついていて、殊に後者は中学以来五十余年の仲間だったから深い意味をそなえていた。

馬座の家は仏教と関係があって、両親や幼死したふたりの妹たちの位牌を飾る仏壇もあるが、それを拝まなくなってから長い歳月が過ぎ去っている。それには彼なりの考え方があるのだが、それを論じるのは場違いだから面倒はこの際さけることにしよう。ひとつだけ指摘すれば、この両三年誕生日である三月三日ごとに書いている遺言書の冒頭に、戒名の必要なしと明記することがその心持の表現であり主張だということになる。そういえば、ことしの初夏死去した中学以来の

仲間も病院でおなじ意味の言葉をのこしたというが、その心持を探り当てる機会を馬座は持つことができなかった。病院へ見舞に行くことが不可能だったからである。

その友人夫妻と親しい間柄だったのは、そのふたりを引き合わせた紹介者という立場も大きな条件になった。友人も馬座も同じ年に結婚をした晩婚同士で、そういう点でも共通なものがあった。

馬座が脳卒中で倒れ意識不明の状態にあったころ駆けつけてくれたその細君は、病人のあられもない姿を見てこういったそうだ。

「これじゃ、うちの人を見舞いによこせないわ。とてもショックに耐えられそうもないもの。」

その良人もまた病人だったと馬座が知ったのは、彼の長い入院中やや快方に向けてから見舞いに来てくれたときである。そのとき友人はこうやって馬座を励ました。

「オレだって病気をかばいながらこうして生きているんだ。あと十年は生きてもらわなければ困る。若いときからエネルギーだった体だから、回復は疑いなしだよ。何か欲しいものはないか。」

「いや、このあいだはありがとう。」

馬座は友人の心遣いのこもった見舞の品に対して礼を述べたが、友人は狼狽の色をうかべた。

「何をいう、そんなことをいうな。」

改まって礼の言葉など口に出す間柄ではないのを忘れたわけではなかったが、感謝の心持を表明したいのは相手の温かい心持がわかっていると告げたかったのと、それを表明する機会は二度と来ないかも知れないと感傷的になったからであった。それは病中の友人が再び病院まで来てくれるかどうかを不安に思ったばかりでなく、自分が果たしていつまで生きるかの自信を持ち得なかったからでもあった。

馬座の入院したのは住んでいる海岸町から寝台自動車で運びこまれるに可能な距離の国立病院で、友人の住む東京から来るのが容易ではないと理解したからである。

そして、それ以後馬座はその友人に逢うことなく歳月は過ぎ去った。その国立病院に百日ばかり厄介になったあと伊豆の温泉病院でその倍近い日数を使って退院してからすでに三年近く、前に述べたとおりどうやら生命をとりとめた現在で

ある。その友人の細君はたびたび東京から見舞いに来てくれたが、良人の病状については詳細を語らなかった。ことしになってからは一度も顔を見せず、見舞いの言葉は手紙によるようになった。一番最近の手紙にはこうあった。

——あなたに衝撃を与えるのを惧れているかのように報告していましたが、実は何度か危険な状態におちいったのでした。現在はどうかやらその状態からは脱出したようです。うちの人は、あなたがどうしておいでかと心配していますが（中略）よくなったら電話で知らせます。

電話での報告のやりとりは手紙同様しばしばあったが、この最後の一行は馬座の神経を揺さぶった。よくなったら、とはおかしい。もしものことがあったら、というのを逆に書いているみたいに響いて来たのである。しかし、馬座はその響を否定した。病院へ見舞いに来てくれたとき、

「あと十年生きてくれなければ。」

といったのは馬座への励ましであると同時に彼自身の願いがこめてあったと聞いた馬座であってみれば、にわかに彼の病状の悪化など予期できなかったのである。

しかし、それらの願いはすべて冗におわった。顔を見たのは病院へ夫妻で見舞いに来てくれたのが最後だが、退院してからの馬座は一度電話で声を聞いている。逢いに行きたいが進退不自由だからもっと先のことになるかと馬座がいうと、

「いや、そんな心配するな。そのうちこっちから行くよ。」

そういった声には以前のそれと変りはなかったが、それっきり出かけて来なかったところをみると、馬座と同程度に進退不自由な状態におちいていたのであろうか。それならば、無理にでもこっちから出かけて逢って励まし合えばよかった。

その晩おそく電話のベルが鳴り、受話器を取り上げた妻の声が変わるのを聞いて馬座の神経はするどく働いた。

「——Aさんが今夜十時十六分病院でお亡くなりになったんですって。」

妻の目から溢れる涙を見ながら、馬座はすこしきつい声を出した。

「誰が電話をかけて来たんだ？」

「親戚の方よ。奥さんは病院ですって。」

「よし、BとCへ電話をかけろ。」

「ハイ。Bさんお出になったら、あなたお話になる？」

「ウム。」

馬座はうなずいて、目をつぶった。すると、そのとたんに幻聴がはじまったのである。

やっと幻聴の話にもどることができた。その幻聴が仏教の念仏唱和のとき叩く鉦の音と知ったのは、どういう知識が基になったのだろう。そういう席には幼いころから縁がなく、十歳のとき父を亡ったあとも三十六歳になって母と別れたときも、そういう経験は持たなかった。懸命に思い出してみると、その鉦の音は芝居の舞台から聞こえてきたものの記憶であった。

しかし、幻聴と知りながら尚長く続いている鉦の音は物がなしい響を馬座の耳に訴えた。仏教に関心を持たない、というよりはむしろ拒否している日常からいけばそれは不思議な現象といわねばなるまいが、そのカンカンカンと彼の知識の教える間合いをおいて繰り返す響は、異様なまでに鮮明に彼の耳をとらえ長く尾を引いた。

前の友人の場合はその成長期までをすごしたのが山深い田舎と知っていたからその鉦の音はその知識を連れて来たものと考えることで馬座は了承した。馬座は見たことがないけれども、友人の父祖の墳墓のたたずまいについては聞いたことがある。もし死後に霊魂というものが残るならば、その友人は父祖の墳墓へ向かってとぼとぼと歩いて行っているのであろう。そのカンカンカンと響く鉦の音は、その歩みに合っていると馬座はひとり歩いて行く後ろ姿を見る気持であった。

だから、この場合の幻聴は自然というべき理由があるが、後者の長い付き合いの歴史を共有している友人の場合には、同じ鉦の音のくりかえしの幻聴には不可解な、解釈に苦しむ馬座であった。死んでも戒名をつけるなどといったとはどういう心持からであったろうか。彼の葬儀はキリスト教形式で行われたと知ったとき、いつ彼がそんな心境になっていたのかと不意打ちを喰った心持におそわれたが、それを知ったあとまでもその幻聴がつづいたのをますます不可解な謎とかんじなければならなかった。

東京に住んでいてひと月ほどの入院のち死去したその友人の通夜にもその翌日の密葬にも妻を代理にやった馬座は、密葬の日ひとりで彼からの手紙やハガキを整理していた。長いつきあいの歴史が目の前に再現して来て、時がすぎて行くのがわからなかった。通夜に行った妻が牧師の司会ぶりについて報告をしたのでその形式を知ったのだが、同じく妻が翌日の密葬に行っているあと、友人を納めた棺が火葬場へ運ばれた時刻に馬座は異様な経験をした。不意に熱っぽくからだ中がほてり、しばらくのあいだ慄えがとまらなかったのである。そして友人の顔

が目にかんで来たが、その顔は目を閉じたきり眠っているかに見える表情の持主であった。

馬座は前にいったとおりに迷信めいたものは一切否定している日常である。このときもこの経験が自分の神経の反射であることを、その方を信じたが、しかし、そういう神経が反射したことを嬉しく感じた。つまり、彼とはそれほどまでに深くつながっていた間柄であったと再認識できたからである。

こんな経験は今までになかったと馬座は過去を振りかえってみる。が、火葬場で焼かれている友人と同じに焼かれている実感を共にするのは、その場に立ち会っていない故でもあることを悟った。進退不自由なからだでなければ当然火葬場へ送って行った自分だ。その口惜しさが与えた異様な経験だとは理屈としては理解できるが、進退不自由なからだになってからも随分親しいひとたちを亡くしている馬座だ。しかも、この経験ははじめてのものであった。鉦の音のくりかえしは、友人の火葬の終わったとおぼしいころに消えた。

ことしになって亡くなったもうひとりの友人は、近来は逢う機会がなかったが、馬座は三十年前古い方の友人と一緒に始めて逢ったという縁があった。もうずっと前死去した共通の友人の細君の病気見舞いに行った馬座たちが亡友から紹介されたのである。だから、これももう古い友人だったのである。同じ海岸町の市部の方に住んでいたその友人は、いや、こんがらがらるから便宜のため ABCD と符牒で呼び分けることにしよう。その死を知らせて来た電話のとき彼を A と呼んだから、BC は省こう。山奥の墳墓へ行った友人を D と呼ぶことにすれば、D を紹介した古い仲間は C ということになる。A の死を知らせた C というのは亡友 C の細君ということだ。

馬座にとって A も C も中学の同窓であった。戦争で東京を逃げ出した馬座が十代のころ住んだこの海岸町にまた住みはじめると A もとなりの海岸町へ逃げ出して来た。C はずっと市部の方に居をかまえていたのである。馬座は四十年近い昔、A と C を北国の亡父の生家へ誘ったことだあった。C は結婚してすでに一子を持っていたが、A も馬座も未婚独身気ままな生活の持主時代であり、A と C とは絵描きであり馬座は原稿紙に字を埋める仕事をしていた。もうひとつ説明すれば、C は亡父の跡をついで寺の住職をも兼ねていたが、その時期にはどちらかといえば絵描きの方に重さがあったから、数日にわたる旅行を気兼ねなくやれる精神構造の持主であった。この三人の五日にわたるのんきな旅行には思い出が数々あるが、話がわき道に走りすぎるから割愛しなければならない。

ただひとつだけ今となればふたりとも亡友になってしまったAとCの逸話を書きとめておきたい。若いころの彼らを知ってもらいたいからである。

馬座の亡父の生家のある北国は仏教のさかんな地方で、その家でも毎朝仏壇に供え物をして礼拝をかかさなかった。そのころ、その家に住んでいたのは、馬座のはるか年長のいとことその父親であった。ふたりとも妻を亡くしているひとり者だが、毎朝の礼拝は信仰のためというよりは習慣によるといった方が当たっているかも知れなかった。というのは、ふたりとも都会生活の経験者で、いとこの方は福沢諭吉から直接教えをうけた経歴の持主であり、その父の方は横浜で長年生糸貿易商をやった前歴の持主であるため、必ずしも盲目的な信徒ではなかったろうとは、馬座の推測であるが。

しかし、本心はともあれ、Cが一寺の住職であることを知ると、毎朝その年女学校を卒業して家に帰っていた娘を馬座たち三人の寝ている座敷へ迎えによこすのであった。

「和尚さま。お願いいたします。」

朝の勤行をたのむわけである。あとで聞くと、家族全部仏間にあつまってCの背後でその読経に声を合わせたそうだが、朝寝坊のAと馬座はその光景を目にしていなかった。またその読経の声も耳にしていなかったのは、田舎の家が広くて仏間と彼らに与えられた座敷とが遠く離れているからであった。Aと馬座はCが呼び出されて出て行ったあと、またうつらうつらと眠りをたのしんでいる。ふたりとも朝寝坊にかけては横綱格で、それについてはこんな笑い話が残っている。

そのときからでも十余年前のことだ。関東大震災のあった大正十二年の翌年、海岸町の住んでいた家がつぶれて東京に居をうつしていた馬座は、その夏Cの寺に避暑をしていたがそこへ遊びに来たAの誘いで阪神間の芦屋へ行ったことがある。そこはAの姉の家で、ふたりはその家の二階の部屋で寝坊のかぎりをつくした。その夏にはAの妹も遊びに来ていたが、姉の意をうけて起しに来るかの女が呆れて、ついにはあのふたりは嗜眠性脳炎かも知れないと本気で心配を訴えたというほどであった。その年はじめて嗜眠性脳炎という病名が新聞紙上にあらわれ人目を惹いたと馬座は覚えている。Cもふたりに負けないくらい朝寝坊だった。だから、朝のお勤めなど自分の寺ではやったことがない。それをここまで来て毎朝呼び出されるのには閉口頓首だったとみえ、三日つづく悲鳴をあげた。

「ジキルはもうたくさんだ。そろそろハイドにさせてくれや。」

ご承知の通りスティヴンスンの『ジキル博士とハイド氏』をもじっての解放願

いだったわけだ。もっともそれにはさらにもうひとつの要因が加わっていた。その前日、はるか年長のいとこの先導で、五キロほどはなれたやなへ鮎を喰いに行ったそのときのことだ。川は最上川でずっと上流の方だが、その家を中心にして上下四里ほどのあいだに四つのやながあった。そのひとつでやなの上に大きな亭があり、馬座たちの一行が行ったとき別室で近在の婆さま連中十五人ほどが宴会をやっていた。

紹介がおくれたが、大学を途中でやめた馬座のいとこは、その後村に居ついたもので、その婆さん連中とはみんな顔見知り以上である。医者から禁酒禁煙を申しわたされている状態で、ということは若いころの行状が推測できるわけだが、同時にひどくひょうきんな気質の持主であった。その婆さま連中に向ってこんなことを話しかけたのは、そのひょうきんな気質と毎朝の仏間での苦行になやまされている C を観察していたからであろう。

「——この方は、有名な××寺のえらい坊さんだから、一席お話を伺ったらどうかな。誰か代表してお願いに來いや。」

この地方は信心ぶかいので知られている。が、婆さま連中の一座にわっと歓声があがったのはそのせいばかりではなかったようだ。その一座にはもう十分に酒がまわっていたのである。C はたちまち丁重な迎えをうけて、ためらい閉口しながら拉し去られた。どういうものか、間の襖ははじめから開け放されていたのである。あとで C の話したところによると、いたずら好きな馬座のいとこの言葉を正直に受け取って仏教に関する話でもしなければなるまいかと覚悟してそっこの座敷へ行ってみると、とんでもない、いきなり盃を持たされ、つまり酒の一斉射撃に合ったというのだ。その景色を馬座は残念ながら見ていない。C が拉し去られると、いとこが間の襖を閉めきったからである。しかし、見ることはできなかったが、情景はかえって目に浮かぶようであった。襖を閉めながらいとこが笑いを浮かべながら片目をつぶって見せたのも効果的というべきで、やがて酒に強い C が真っ赤な顔でもどって来ながら

「いや、驚きましたな。東北のひとは男も女も大酒とは聞いていましたが、とんでも太刀打ちできません。降参して逃げて来ました。」

その言葉が彼のうけた歓待ぶりを説明して余りありだ。

「それはご苦労さま。さすがの C もたまりかね、かね。」

すかさず入れた A の半盃が C を苦笑いさせたが、一言もない模様であった。

婆さまたちが C をサカナにどれだけはしゃいだかは、そのあと歌い出した賑や

かさが物語ったが、東北いやこのへんの女たちの酒についてはすでに経験のある馬座であった。このいとこの長男は彼よりひとつ年下で、当時横浜の火災保険会社につとめていたが、父親と同じ大学出身である。これが五年前結婚したときの話だ。馬座も呼び出されてこの山奥の家に来たが、話には聞いていた結婚式とその披露宴の仰々しくもはなばなしい行事にびっくりさせられたものである。

いや、一週間もつづいた披露宴をいちいち記していたのでは話がそれてしまうばかりでなく、長引くばかりだから、酒に強い女たちだけに話をしぼることにしよう。結婚式の当日は親族たち、次の晩は町の有力者たち、その次の晩は部落の主婦連中という順であった。最初の日、馬座も客として列席したが次の日からはもう客ではなく、主人側のひとりとして接待役に回らねばならない。接待役となれば、羽織を着ることは許されない。紋付に袴をはいての恰好でお酌をしまわるのである。しかし、二十七軒ある部落の主婦たちの酒に驚くのには間があった。老若二十七人の主婦たちはみんな裾模様の紋服をきっちり着込んで、順序正しく膳についている。新郎新婦はその夜も揃って座についていたのは顔見せだからである。新郎の弟や馬座などの接待役は申しわたされた客たちの前に座って、銚子を持った。しかし、客の主婦連中は素直に酌を受けてくれない。

「どうぞ。」

と馬座がすすめても、

「不調法でやんして。」

と、伏せた盃を手に取ろうとしない。それではと隣の客の前へ行ってすすめても、同じことの繰り返しである。馬座の日常の習慣からすれば、固辞する相手に強いることは失礼になるのだからあっさりと引き下がってしまったのだが、このへんの風習では、それではいけないのだ。すすめる、固辞する、もっとすすめる、また固辞する。しかし、接待役としては客が受けるまですすめなければ役目はすまない。いや、それだけではまだいけないのである。

「お合いいたしやんす。」

と、客が盃をくれるのを催促しなければならない。こういう順序を際限なく繰り返すのだから、客も接待役も酒が強くなければつとまらないし、またこういう修行でひとりでに豪酒になるのであろう。

その結婚式は五月の初旬だったが、毎夜空が白みはじめるまで酒宴がつづくのであった。最初の夜、開け放ってある雨戸のそとを眺め水色に澄んでいる暁の空に庭の桜の大木が満開なのを見出して、何かはかない想いにしいんとした気持を

味わったのを馬座は四十年後の現在でも胸に刻みつけている。

そういう酒の修行をしてきた婆さま連中からサカナにされては、さすがの C も勝ち味はなかったにちがいない。毎朝のお勤めに加えてのそれではジキル廃業を申し出るのも無理はないと、A は馬座に向かって口添えをしたものだ。

「まあ、いいところで解放してやろうじゃないか。あんまり馴れないことをつづけると精神がおかしくなってしまうぜ。」

すると、C は大きなからだを二重に折って、手を合わせた。

「お願い。お願い。まさに、この通り。」

A の葬儀は密葬の十日ほどのち行われた。馬座は妻に弔辞を待たせてやった。無理しないようにとは A の友人たちからいわれたし、馬座としても大勢の会葬者の前でおちついた姿勢を保ち続けるのは辛かった。まさか取り乱したりするぶざまなところを見せることはないであろうとは思ったものの、必ずしも自信はなかったし A 夫人の顔を見るのも辛かった。通夜密葬に出て火葬場まで行った妻に無理しないようにと言ってくれた A 夫人の心づかいを素直にうけとりたい心持でもあった。

弔辞は前日机に向かっているうちに浮かんで来た言葉をそのまま書きつけただけで、ひとりでに詩の形になったそれは故人 A に呼びかける心持のあらわれであった。死者に呼びかけることなど平常の心持と矛盾しているわけだが、あまりにすらすらとうかんで来たその言葉は生きている A に語りかけ別れを告げる心持をあらわすために重要な意味があった。

A よ 安らかに眠れ にはじまり、最後に A よ もう一度くりかえそう

A よ 安らかに眠れ さようなら

と結んだその弔辞は、馬座自身の自分への訴えであって、祭壇の前で読まれることなど考えてもいなかった。だから、帰ってきた妻からそういう報告をうけると、瞬間うろたえなければならなかった。

「そんなつもりは全然なかったんだ。だから、あれを入れた封筒にも弔辞と書かず、ただ弔とだけ書いたんだ。」

馬座が文句をつけると、妻は宥める語気でいった。

「でも、A の奥さん喜んでいらしたわ。古いお友だちはあなたひとりだけなんですもの。」

「誰が読んだんだ？」

「A さんのお弟子さんよ。弔辞をお読みになった方。」

その弟子を馬座は知っている。

「どういって紹介したんだ、オレのことを。」

「中学以来五十余年の親友とって。」

それを聞いたとたん肩の重荷が下りた気持になった。それならば死者のAもうなずいてくれるだろう。Aはひとに馬座を紹介するとき、ガキの時分からの友だちだと肩書をつける癖があったのを思い出したのである。

「Cの寺へ電話をかけたのは、丁度そのころだった。」

「奥さんいらした？××さんとは向うでお逢いしたわ。」

××とは馬座が名付け親になった二代目Cのことだ。

「ウム、電話でしゃべったよ。昔ばなしをね。あの弔辞にも書いたが、Aともいろいろのことがあったし、Cともいろいろのことがあったからね。」

そういう過去を追いかけるみたいに目をつぶると、瞼の裏にはAとCの姿がからみ合ってきた。馬座はまた幻聴がはじまるなど予感におそわれた。その通りであった。が、こんどの幻聴は久しぶりの、伊豆の温泉病院で聞いたガラスの鈴の鳴る音であった。どうしてその音が復活したのかとその音に神経をあつめ、馬座はかたわらの妻の存在を忘れた。

(いまい たつお)

「鶴沼を語る会」活動の記録

(平成 27 年 10 月～28 年 3 月)

平成 27 年 10 月例会 10 月 6 日(火) 10 時～12 時 21 名出席

司会進行 綿谷会員

- 会誌111号：戦後70年の節目の年にちなみ「終戦前後の記憶」を22名の会員が執筆した。制作部数は200冊、出席者に席上配付し欠席者には別途配付した。
- 公民館まつり：開催は10月17-18日。どのような著名人が鶴沼の何処に住んでいたかを活動分野別に地図に表示、展示する。展示内容および準備作業スケジュールを説明、協力者を募った。
- 創立40周年記念講演会：開催は11月21日。講師に佐江衆一氏を招き、阿部昭の文学と鶴沼での交遊について話してもらおう。講演会テーマは『鶴沼の作家阿部昭を語る』 作業スケジュールの説明後、鶴沼を語る会が担当するスライドショーのプレビューがあった。

公民館まつり展示参加 10月17日(土) 10時～4時、18日(日)10時～3時

第3談話室に、鶴沼に住んでいた著名人の居場所を活動分野別に表示した地図をパネル展示。来場者の多くが、関心を持って見入っていた。(参照P27～33)

10 月運営委員会 10 月 27 日(火) 10 時～12 時 10 名出席

11 月例会 11 月 10 日(火) 10 時～12 時 19 名出席

司会進行 中島会員

- 公民館まつり報告：鶴沼をもっと知ってほしいという展示趣旨は活かされていた。住居場所が市内地図の下部に集中しているので、目線での展示に心掛ける工夫が必要。
- 創立40周年記念講演会『鶴沼の作家 阿部昭を語る』：概要説明と準備作業の確認、開催当日の役割分担を決めた。報道機関(朝日/毎日/神奈川/タウンニュース)へアプローチ、開催記事掲載を依頼。
- その他：・新プロジェクト「本真寺と本真尼」調査が提起され論議した。
 - ・11月24日開催の40周年記念懇親会の参加者申込最終受付をした。

創立40周年記念講演会『鶴沼の作家 阿部昭を語る』 11月21日(土)

13時30分～16時 鶴沼公民館ホール 講師：佐江衆一氏
公民館と当会の共催。160名余の来場者があり成功裡に終了。11時から会場設営、
13時受付開始。配付資料、アンケート用紙は座席に用意した。事前にテスト
したにもかかわらずスライド機器の調整がうまくゆかず苦勞した。(参照34-35)

11月運営委員会 11月24日(火) 10時～12時 12名出席

40周年記念親睦会 11月24日(火) 12時30分～15時 煌蘭 25名出席
当会創立40周年記念の行事として、さいか屋デパート8階煌蘭にて開催。多数
の出席のもと盛大に行われ、会の歴史も語りながらお互いの親交を深めた。

12月例会 12月8日(火) 10時～12時 17名出席
司会進行 岡田会員

開催に先立ち、10月に逝去された伊藤聖元会長の冥福を祈って黙禱をした。
— 11月21日の講演会報告：準備から当日対応、アンケート分析、感想等の報告。
— 11月24日の親睦会報告：会計報告とともに意見、感想を聞いた。
『お話』—鶴沼郷土資料展示室で開催中の「鶴沼で暮らした文人とその作品の紹
介」を内藤会員の解説付きで見学した。

12月運営委員会 12月22日(火) 10時～12時 10名出席

平成28年1月例会および新年会 1月19日(火) 11時30分～14時 18名出席
場所 アコレード(鶴沼海岸マリンロード)

例会 司会進行 佐藤弘会員

報告事項：会誌112号原稿の現状報告ならびに投稿募集が展開された。

湘南白百合学園から昔の遊びについて出張授業の打診あったこと
が報告され、引き受けることが了解された。

新年会 司会進行 柴田会員

有田会長挨拶、内田会員の音頭により乾杯。希望者によるお話、歓談後、恒
例のビンゴゲームにより和やかなムードのなか、西野行会員の閉会の挨拶と
一本締めでお開きとなった。

1月運営委員会 1月26日(火) 10時～12時 10名出席

2月例会 2月9日(火) 10時～12時 20名出席

司会進行 有田会長

- 新年会の会計報告：収支内容の説明がされた。
- 会誌「鶴沼」112号について：進捗状況が報告された。
- 湘南白百合学園小学校出張授業について：計画内容が報告された。併せて協力者を募り決定した。

『お話』—「申年（さるどし）にちなんで」をテーマに、綿谷会員からさるという言葉にまつわる話、自作の句等を聞いた。（参照P39）

- 「本真尼と本真寺 その1」 岡田会員から、鶴沼海岸に庵を開き、全国規模で災害ボランティア活動のはしりとなった尼僧についての話を聞いた。（参照P1-26）

2月運営委員会 2月23日(火) 10時～12時 9名出席

出張授業：3月4日(金曜日) 湘南白百合学園小学校2学年3クラス生徒対象
テーマは「子どもの頃の遊び」（参照P36-37）

3月例会 3月8日(火) 10時～12時 18名出席

司会進行 竹内会員

- 湘南白百合学園小学校2年生への出張授業報告：3月4日森岡会員他で実施した内容について報告があった。
- 会誌112号について：掲載原稿ならびにページ構成の説明、印刷、製本日程の案内があり協力者を募った。
- その他：神奈川近代文学館催しのチラシと招待券：希望者に配付した。

『お話』—「本真尼と本真寺 その2」：前月に引き続き岡田会員から後半の話を聞いた。（参照P1-26）

3月運営委員会 3月29日(火) 11名出席

在籍会員数 54名（10月以降の新規加入者無し）

編集後記

- 今年の冬は暖かかったり寒かったり、そう感じているうちに春の到来だ。冬にしっかり寒さが来ないと、桜の開花が遅れる。芽が深く冬眠できず、うとうと状態で春の暖かさに敏感に反応しないからだという。あちらこちらで桜は咲き始めたが、満開になるのは平年より遅めのようだ。▽鶴沼の尼寺には颯田本真尼という偉い尼僧がいたことが、岡田会員の調査で分かってきた。3月11日は東日本大震災から5年。地震、津波、原発事故の恐ろしい記憶を新たにしたが、過去にも大震災は何度も起きている。本真尼はその都度、被災地に物資を届けたという。その活動が半端でないことに驚かされる。(弥)
- 鶴沼で“尼寺”と親しまれている本真寺について、鶴沼を語る会ではキチンとした調査を今まで行ったことがない。かくいう私も藤吉慈海師が書かれた本真尼の伝記はずっと以前に読んでいながら、そこに気付かなかった。昨秋、坂上雅翁関西国際大学教授の「徳雲寺所蔵 颯田本真尼の進出資料」をネットで拝見し、本真寺を地元でもっと調べなければという気になった。約半年の成果は掲載するのも恥ずかしいレベルだが、これが端緒となって新資料発見や情報交換など更なる調査研究の手掛りになることを期待している。(岡田)
- 「鶴沼の思い出」を寄稿された中島誠之助氏は古美術鑑定家として人気TV番組「なんでも鑑定団」に出演しているので、ご存知の方も多いのではないか。戦後70年…終戦前後の記憶を特集した会誌111号を同氏に送ったところ、自分が知らなかったことがたくさん記されていた、と感想を述べられ今回の寄稿に至った。彼は幼年時代、鶴沼海岸で過しており私とは小学校で同級生、同じ思い出を持っている仲である。戦後まもなく鶴沼を離れるが寄せられた文章を読むと、われわれが忘れていた鶴沼の当時の生活を、タイムカプセルを開けたように鮮明に思い出させてくれる。文中の“ずぶ濡れの着物掘り出す敗戦忌”の句は、養母の白川晴子さんが着物を空襲による焼失から守るため土中に埋めていたことを詠んだもの。また同号を読んだ思いを産経新聞に寄稿されたので、併せて掲載した。▽3月4日の湘南白百合学園小学校への出張授業は、当会としても久しいことである。いろいろな子どもの頃の遊びをしたが、紙ヒコーキを担当。一枚の紙から立体的な姿に変化する過程に子ども達は目を見張り、廊下でのテスト飛行に成功すると歓声をあげていた。胴体や翼にカラーペンで凝った絵を描きマイヒコーキが完成。手作りのヒコーキは宝物、家族みんなで遊びたいと持ち帰ったのが印象的であった。後日、子どもたちから素晴らしいお礼の絵手紙が届き、皆、感動していた。(有田)

『鵜沼』 第 112 号
平成 28 年 3 月 31 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>